朝鮮語教育と学習書の現状について
―― 母音解説で見られる問題点を中心として ――

熊　谷　明　泰*

はじめに

何事も足元を固めてこそ事は成就するというが、外国語の教育研究においても、朝鮮語に多くの関心が注がれるのは望ましいことである。「国際化」時代にあって、隣の国の人々と仲良くできないようでは、万事、事がうまく運ぶはずもないからだ。まして、その相手たるや、日本の植民地支配によって民族の誇りを傷付けられてきた朝鮮半島の人々で、そのしこりは癒されないままだ。半世紀もの間、植民地支配下で繰り返された朝鮮民族に対する人権侵害は頬被りされ続けた。そんな未解決の問題を国連人権委員会など国際舞台に持ち込まれるようなぶざまな姿を曝しているようでは、日本の国際的信用も何もあったものではない。

こうしたさまざまな意味において、1997年度より全学的に朝鮮語が選択必修外国語科目に組み込まれたことは、関西大学百十余年の歴史における一大快挙であり、まことに喜ばしい限りである。

今後、教材・カリキュラムの開発整備、教授法の研究、図書文献の収集管理、教員スタッフの充実等、さまざまな問題をこなしていくためには、朝鮮語担当教員のみならず、学内諸方面からの御協力も仰がなくてはならない。

外国語教育を考えるにあたって、まず指摘しておきたい点は、ことばは「両刃の刃」になりうるということだ。だから、朝鮮語を学ぶことは日韓関係改善につながると単純に喜ぶのは、天真爛漫すぎるきらいがある。思えば、韓国への関心が大衆レベルで広まるのと時を同じくして現れたのが、いわゆる「韓国通」の間から出てきた「嫌韓論」であった。そして、植民地時代のことをいくら「謝罪」しても韓国人は聞く耳を持たないといった議論が、鳴り物入りで繰り返されてきた。それが当を得た議論であるか否かについては、ここで問題にしようとは思わない。「嫌韓」論者たちの発想の根底に、朝鮮民族に対する拭いがたい差別意識、「ヤマト民族」のショービニズムが見え隠れしていることが問題なのだ。

外国語を学ぶということは、その国や民族の文化・歴史総体と向き合うことである。従って、ことばが背景に抱える社会的・歴史的問題は、常に問題意識の奥底にとどめられていなければならないだろう。教育研究に関わる姿勢そのものを、常に意識せざるを得ない朝鮮語の世界に関わる者としては、外国語教育の効率性ばかりを強調しているわけにはいかないのである。

大学という存在が、今もその誇りを維持できているのは、「知性と良識」を追求することを忘れていないからである。2000年4月から、外国語の教育研究を主たる任務とする「外国語教育研究機構」が新たに発足する。文学部から新たな機構に移籍するこの時期にあたり、外国語教育に携わる者は、決していわゆる「語学屋」に甘んじるようなことがあってはならないと、自戒の意味を込めて記しておきたい。

本稿は朝鮮語受講生を対象として実施したア

* 関西大学文学部教授

ンケート調査の結果を踏まえながら、本学における朝鮮語教育のあるべき姿を考察してみようとするものである。また、今後解決すべきさまざまな課題のうち、特に教材選定・教材編纂に関する議論を始める糸口として、日本で出版された朝鮮語学習書120余点を取り上げ、その母音の文字と発音に関する記述部分を分析するものである。「一事が万事」というように、このわずかな分析だけでも、市中の朝鮮語学習書がかなりの問題点を抱えているであろうことが理解できるだろう。そして、本学における朝鮮語教材の選択、あるいは編纂を進める上で、検討すべき課題が山積していることを再確認する機会となるだろう。

母音字とその発音解説は、朝鮮語学習書のほんの冒頭部分に過ぎない。しかしj、本稿第2章で見るように、二重母音「ㅢ /ωj/、あるいは/ω i/、ωi/)」の音価の問題一つだけとってみても、非常に複雑な問題が絡んでいる。日本のみならず、南北朝鮮における学界においても、決定的な学説が提示され得ない状況にある。

このように細部にわたる検討を加えていくならば、外国語教材の選定や編纂は一般に考えられているほど容易なことではないことが理解されるだろう。本稿はそうした意味で、朝鮮語教材を考えるにあたっても、少しなりとも参考になれば幸いである。

第1章　アンケート調査から見た本学における朝鮮語教育の現状

第1節　アンケート調査の概要

1999年9月末から10月初めにかけて、本学朝鮮語受講生を対象として実施したアンケート調査では、以下の9つの質問項目を設定し、ほとんどの項目を自由記述方式にした。なお、アンケート回答者総数は187名で、その内訳は千里山キャンパス144名（1部学生118名、2部学生26名)、高槻キャンパス43名だった。

＜質問項目＞

1．あなたが朝鮮語を選択した理由を出来るだけ詳しく、率直に述べてください。
2．朝鮮語を選択してどう思っていますか。また、その理由を述べてください。(「よかった」、「よくなかった」、「どちらとも言えない」の三肢選択)
3．あなたにとって、朝鮮語を学ぶ意味は何ですか。またどんなことに役立てたいですか。
4．どの程度まで朝鮮語を身に付けたいと思っていますか。
5．韓国・朝鮮に関して、どんな関心を持っていますか。
6．朝鮮語の授業に対して、今後希望することは何ですか。
7．韓国語学研修旅行が実施されれば行きたいと思いますか。(「行きたいと思う」、「行きたいとは思わない」の二肢選択)
8．韓国語学研修旅行では、韓国語授業の受講以外にどんなことがしたいですか。
9．韓国語学研修旅行の期間はどの程度がいいですか。(「2週間程度」、「3週間程度」、「4週間程度」、「1ヶ月以上」の四肢選択)

第2節　アンケート調査の結果について

以下、各質問項目別に調査結果をまとめながら、今後の課題等について言及したい。

2−1. 朝鮮語を選択した理由

朝鮮語を選択した理由として、以下のような回答が見られた。(括弧内の数字は、回答数)

日本語と言語構造が似ているから (46)、隣の国の言語だから (38)、文字に興味を抱いたから (21)、在日韓国・朝鮮人の友人がいるから (22)、学びやすい言語だから (18)、あまり学ばれていない言語だから (18)、韓国を旅行するとき、話したいから (17)、韓国に行って刺激を受けたか

ら（16）、朝鮮語に関心があったから（15）、欧米語を避けたかったから・英語が嫌だから（13）、友人、知人、中学・高校の先生、家族からの影響（10）、朝鮮民族の血を受け継いでいるから（9）、朝鮮語の将来性（7）、日韓共催サッカーワールドカップが開かれるから（4）

朝鮮語を選択した理由として、日本語との言語構造の類似性をあげた学生がもっとも多かったが、これは「学びやすい言語だから」という理由とも共通するものである。たしかに朝鮮語は日本語話者にとっては学びやすい言語である。

また、隣の国の言葉だから朝鮮語を選択しようと思ったというのが2番目に多い回答だった。一見当然過ぎる理由ではあるが、朝鮮民族に対する蔑視や不当な扱いを重ねてきた日本社会を顧みるとき、ここからは極めて健全な思考の営みが伺えるといえよう。

更に、韓国を旅行して話したいとか、韓国に行って刺激を受けたいからという回答も多く見られた。渡航が比較的容易で、事実多くの日本人が韓国を旅行している現実を反映したものであり（1999年には118万人の日本人が韓国に渡航している）、今後日本人にとってもっとも身近な外国として韓国が浮上していくことであろう。

在日韓国・朝鮮人の友人がいるからという選択理由が多く記された点は、いかにも大阪にある大学らしいところである。

ところで、ここで注目したいことは、自分が朝鮮民族の血を受け継いでいるから朝鮮語を選択しようと思ったと、9名の学生が明確に回答を寄せている点である。以下、この側面に焦点を絞って思うところを記してみたい。

注目される回答の中には、次のような切実な体験や、自己存在に対する確認の言葉が見られる。

「自分は在日3世で、小・中・高を通して公立の学校に通っており、母国語を学ぶ環境がなかった。一度でもいいから勉強したかった。」

「母国語くらいは話せるようになりたいから。自分の名前も書けないのが情けなかった。」

「祖父が韓国人で、私にも韓国の血が流れているから。韓国人と知り合いになって「私は日本と韓国のクォーターだ」と言うとよろこんでくれるが、韓国語が話せないことを知ると、とても残念そうな顔をされる。」

「帰化したが高校の時まで国籍が韓国だったため、ハングルがどのような言語なのか興味を持ったから。」

このように在日韓国・朝鮮人としての自分を見つめ、飾り気なく書かれた言葉に私は感動を覚える。そして、こうした学生に恵まれたことを知るとき、朝鮮語担当教員は襟を正さなければならないと、改めて思うのである。

法務省統計（1998年現在）によれば、在日韓国・朝鮮人総数は645,373名で、その47%にあたる302,776名が京阪神を中心として近畿地方に在住している。また日本国籍であっても、帰化した人など朝鮮民族の血を受け継ぐ人を含めると、この数字はもっと多くなる。ちなみに、本学には1999年5月1日現在、263名（男185名、女78名、ただし、韓国からの留学生数は含んでいない）の韓国籍・朝鮮籍[1]を持つ学部学生が在籍している。

日本社会においては、在日韓国・朝鮮人が民族語を学習・使用する権利が社会的に保障されなければならないという意識が希薄である。在日韓国・朝鮮人子女の多くが朝鮮語を学ぶ機会に恵まれていない現実は、在日韓国・朝鮮人が形成された歴史や現実に対して、日本人社会が真摯に向き合って来なかったことにも責任がある。それはまた、今日、「国際理解」教育の重要性をはやり言葉のように唱える日本社会が、足元の問題をなおざりにしてきた皮肉な結果でもある。

日本社会が「国際化」を図ろうとするのであれば、もっとも身近な外国人である在日韓国・

朝鮮人の言語権を保障するためにも、さまざまな模索が試みられなくてはならない。

今も存在する在日韓国・朝鮮人に対する不当な処遇や蔑視は、「文句があるなら日本から出て行け」といった排外主義的発想や国粋主義と裏腹の関係にある。このことは、朝鮮植民地支配をめぐって、「自虐史観批判」という日本近代史見直し議論が一世を風靡していることからも確認されるところだ。

今後とも深刻さが一向に解消されそうにもない世界各地の民族問題・民族紛争の情報に接しながらも、在日韓国・朝鮮人問題のような自分の足元の問題に無関心な人々によって進められるバタ臭い「国際化」や「国際交流」は、所詮、教養主義的サロンの飾り物の域を出ないだろう。

本学における朝鮮語教育は、朝鮮語を学ぶ機会に恵まれなかった学生たちが、民族的矜持を育み、民族的帰属意識を高めていく上で重要な契機ともなりうるものである。定期試験の際、ある学生は答案用紙の裏に、次のように民族性回復への思いを綴った。

「私は在日3世で、もう母国語がわからない。ずっとイルボンハッキョ（日本学校）に通っていたからということもあるけど、朝高（朝鮮高級学校）出身の子らは、みんなしゃべれる。なんか同じ民族と言うけど、違いができた。……私もしゃべれるようになりたい。だから大学で朝鮮語をとりました。誰も教えてくれないと思うし、今しか学べないと思う。」

「私もしゃべれるようになりたい」というこの学生にとって、朝鮮語は日本人学生にとっての単なる「外国語」ではない。こうした在日韓国・朝鮮人学生の思いにも応えていかなくてはならない。しかしながら現状は彼らの願いに添うものとはなっていない側面がある。

本学で開講されている朝鮮語Ⅰから朝鮮語Ⅵまでの科目のうち、学部や学科によってはカリキュラム構成上、そのうちの一部の科目しか受講できなかったり、あるいは朝鮮語は全く受講できない学部もある。こうした点は早急に改善される方向で検討されなければならない。

在日韓国・朝鮮人集住地域である関西地方で大規模総合大学を誇る本学であるだけに、朝鮮語科目も最大限に受講できるよう、可能な限りの配慮がなされてもいいのではないかと考える。

2－2. 朝鮮語を選択してどう思っているか

朝鮮語を選択してどう思っているかという質問に対して、次のような回答が得られた。

全学では、「よかった」123名（66%）、「よくなかった」9名（5%）、「どちらとも言えない」55名（29%）という結果が出たが、以下に示すように、キャンパスごとにかなりの相異が見られた。

＜千里山キャンパス（1部）＞

「よかった」82名（69%）、「よくなかった」3名（3%）、「どちらとも言えない」33名（28%）

＜千里山キャンパス（2部）＞

「よかった」22名（85%）、「よくなかった」0名（0%）、「どちらとも言えない」4名（15%）

＜高槻キャンパス＞

「よかった」19名（44%）、「よくなかった」6名（14%）、「どちらとも言えない」18名（42%）

このように回答にばらつきが見られる原因がどこにあるのかについても検討を加え、改善を図っていかなければならない。

朝鮮語を選択して「よかった」理由としては、「学びやすい」（43）、「ハングル（文字）が読めるようになった」（18）、「面白い・楽しい」（14）、「韓国・朝鮮の文化が学べる」（14）、「先生がよい」（10）、「少人数のクラスだから」（8）、「韓国を旅行して役立ったから」（4）、「韓国が身近に感じられるようになったから」（4）などの回答が寄せられた。（括弧内の数値は回答数）

「学びやすい」からよかったという回答は、朝鮮語を選択した理由としてもっとも多くの学生

が記した「言語構造が日本語と似ていて学びやすい」という回答と内容的に軌を一にするものである。

このほか「自分の名前が書けてうれしい」と回答した在日の学生もいる。

一方、朝鮮語を選択して「よくなかった」理由としては、「難しいから」と6名が回答している。

「どちらとも言えない」理由としては、「難しい」(18)、「上達しない」(11)、「学び始めたばかりだから判断保留」(7)、「少人数クラスが嫌だから」(3)などが上げられた。

2−3. 朝鮮語を学ぶ意味

比較的多く示された回答は、以下のように要約することができる。

「韓国人と朝鮮語で話したい」、「旅行で役立てたい」、「韓国について知りたい」、「両民族の友好の架け橋になりたい」、「自分を豊かにしたい」、「将来の職業に生かしたい」、「母国語だから」、「ワールドカップに協力したい」など。

2−4. どの程度、朝鮮語を身に付けたいと思うか。

圧倒的多数の回答は、初歩的であれ日常会話が出来るようになりたいというものである。

ひと昔前の大学生は、大学で外国語科目を選択しても、それを実際に用いたいと実感することは、さほど多くなかった。しかし海外渡航も特別なことでなくなった今日においては、学生たちはたとえ片言であっても実際に話せるようになることを強く願っている。そして、大学における外国語教育は、会話能力を養うためにコミュニケーションクラスを開設することなど、積極的な対応が求められるようになった。

韓国の人々との接触・交流は他の諸外国に比べても頻繁に行なわれており、たとえ初歩的なレベルであれ朝鮮語による会話能力を育成するという課題は、本学における朝鮮語教育においても遂行されなければならない。

ところで、韓国における日本語教育は、日本における朝鮮語教育とは全く比較にならないほど熱心に展開されている。たとえば、韓国の高校では第2外国語科目のうち日本語を選択する者が最も多く、また半数近くの大学に日本語・日本文化関連学科が設置されているほどである。更に、植民地時代に日本語を身に付けた世代も健在しており、こうした言語的背景から、日本人の多くは韓国人の日本語によるコミュニケーション能力に依存しながら、日本語を介した交流を行なっている状況にある。

しかし、将来における日韓関係の理想を考えるならば、こうした言語的アンバランスは好ましくない。朝鮮民族に対して日本語による言語支配を行った歴史を持つ旧宗主国側の日本社会で、朝鮮語によるコミュニケーション能力を身につけた人間が一人でも多く育つことは、朝鮮半島の人々から確かな信頼を得るきっかけとなるはずである。この点でも、大学における朝鮮語教育の果たす歴史的役割は大きい。

ちなみに、日本の高等学校では1997年現在、高等学校全体の2%弱に相当する103校で朝鮮語の授業が開講され、履修者数は3,929人となっている。[2] この数は多いと言えるものではないにしても、ドイツ語の97校、4,767人に匹敵するものである。

今日、「大学入試センター試験」では、外国語科目として英語、フランス語、ドイツ語、中国語の試験が行なわれている。朝鮮語もこれに加えるべく検討されることを望むのは、朝鮮語教育に関わる者の独りよがりな思いでもないはずである。朝鮮語の場合、日本語を母語として生まれ育ちつつも、朝鮮語を学んでいる多数の在日韓国・朝鮮人子女が存在しており、潜在的な受験者数はかなりの数にのぼる。「同化」ではなく、「民族共生」の社会を目指すのであれば、当

然検討されるべきことである。

効果的な朝鮮語教育を遂行するためには、日本語生得話者と朝鮮語生得話者が役割を分担しながら授業を行う必要がある。本学においても、第二言語としての朝鮮語教育に関する理論と経験を兼ね備えた専門家を教員として韓国から招き、コミュニケーションクラスの開設を実現しなければならない。

また、本学の実情に適合したさまざまな教材開発も進められなければならない。そのためにも、朝鮮語教育を専門とする言語感覚面でも優れた韓国人研究者をパートナーに持つことが必要である。このような意味から、特任外国語講師の早期採用など、有効な施策が早急に講じられなければならない。

2−5. 韓国・朝鮮に対する関心

学生たちは、韓国・朝鮮に対して次のような関心が抱いているとアンケートで回答している。

「韓国・北朝鮮の歴史・文化・経済」、「北朝鮮の政治・テポドン発射問題」、「日韓・日朝関係」、「料理」、「南北関係」、「旅行」、「スポーツ」など。

2−6. 朝鮮語授業に対する希望

朝鮮語の授業に対しては、次のような要望が多く寄せられている。

「授業の進度を落としてほしい」、「日常会話の学習を重視してほしい」、「分かりやすく授業を進めてほしい」、「歴史・文化・習慣なども取り込んで教えてほしい」、「ビデオ・CDなど多様な教材を用いてほしい」、「楽しい授業をしてほしい」、「発音練習をしっかりしてほしい」など。

2−7. 韓国語語学研修旅行に参加したいか

この点については、次のような回答が寄せられた。

「行きたいと思う」127名（69%）、「行きたいとは思わない」46名（25%）、「分からない」4名（2%）、無回答6名（3%）。

2−8. 韓国語学研修旅行で何がしたいか

朝鮮語の授業を受講すること以外に、次のようなことがしたいと答えている。

圧倒的に多かった回答は、「人との出会い、交流、ホームステイ」を求める声であり、その他「文化に触れる」、「観光」、「料理を楽しむ」、「歴史を考える」、「ショッピング」など。

2−9. 韓国語学研修旅行の期間

以下に示すように、期間は2週間程度がよいとの回答が約半数を占めている。

2週間程度86名（46%）、3週間程度21名（11%）、4週間程度16名（6%）、1ヶ月以上18名（10%）、

上記のほか、3日間1名（1%）、1週間位3名（2%）、2〜3週間1名（1%）、4週間〜1ヶ月以上1名（1%）、無回答39名（21%）となっている。

韓国での研修旅行は、学生たちが韓国に対して総合的な理解を深め、また朝鮮語学習への強力な動機付けともなる。多くの学生が韓国の人々との出会いや交流を求めているが、それは韓国をより深く理解する上で、もっとも必要なことである。学生たちの希望も聞きながら、実現させる方向で準備を進めたいと考える。

第2章　朝鮮語学習書の現状分析

第1節　統一教材採用の意味について

外国語教育においては、言うまでもなく教材選択は重要な問題である。朝鮮語担当講師のなかには朝鮮語学専攻者もいるが、その他にもさまざまな専門分野に携わる研究者が講義を担当している。言語学専攻者だからといって、必ずしも教室での外国語教育能力に長けているわけ

でもない。しかし、一般的傾向として一定の時間を費やして朝鮮語学（Korean Linguistics）に接する機会を持たなかった講師は、授業を進めるにあたって、基準とすべき音韻体系や文法体系をていねいに検討することなく、教科書の記述内容にそのまま依存する度合いが高くなるだろう。

こうした意味でも、慎重な教材選択は大学における外国語教育の質を維持する上で、おろそかに出来ない重要案件の一つである。

千里山キャンパスでは1999年度より、高槻キャンパスでは2000年度より「朝鮮語Ⅰ・Ⅱ」において統一教材を採用し、2001年度からは千里山キャンパスの「朝鮮語Ⅲ・Ⅳ」、高槻キャンパスの「朝鮮語Ⅳ・Ⅴ」において統一教材を採用する予定である。今後、本学のカリキュラムに適合した教材を選定もしくは編纂しながら、教授法上の問題点を担当教員間で研究する作業は、本学の朝鮮語教育を発展させていく上でも欠かせない課題である。

統一教材を採用するからと言って、金太郎飴式の教育を目指すのではない。萎縮しないで教員の持ち味がクラスごとに発揮された教育こそ理想的な姿である。ただ、朝鮮語の音韻体系や文法体系も画一的ではあり得ないため、本学ではいかなる体系に基づいて教育するかについては、あらかじめ決めておかなければならない。また、学習到達目標についても、具体的に文字・音韻・文法・語彙・表現（文型）に関する項目を立て、学習段階別に設定しなければならない。

第２節　朝鮮語学習書の現状

ところで、日本で出版されている数々の朝鮮語学習書を見ると、思わず首を傾げたくなる類のものが少なくない。そんな科学性と体系性に欠けるものの大半は、朝鮮語学を専攻領域としない人々によって書かれている。本来、朝鮮語学習書を著すにあたって最低限必要な朝鮮語学や言語学上の基礎的事項も確認しようとしないまま、世に問おうなどという無謀さは許されることではないはずだ。朝鮮語学専攻の看板を掲げた者だけの専売特許だとは言わないが、朝鮮語学習書を著すにあたっては、一般の読み物とは違って学習者に対する責任が重いだけに（特に初学者は書かれていることの真偽が判断できない）、それなりの慎重さが求められる。

今日、奇をてらった朝鮮語学習書まで書店の棚を飾っているさまを苦々しく眺めているのは、私一人でもないだろう。こうした状況は好意的に見れば、今や朝鮮語学習が日本社会において市民権を獲得し、多様な学習者の存在を反映したものであるとも言えよう。しかし、朝鮮語教育に携わり、多くの人々が朝鮮語をきっちりと学んでいただきたいと願っている者としては、そんな評論めいたことで、ことを見過ごすわけには行かないのである。出版文化の過度な商業主義への傾斜は、書くことへの畏敬の念を削ぎ落としている感さえ抱かせる。

また、大学生の雰囲気が変化した今の時代に合わせると言って、教科書がやたら薄っぺらい内容になり、紙質と色彩・デザインばかりが華麗になっていくという、豊かさゆえの精神的貧困は歓迎すべきことではない。時代が変わったからと言って、一つの外国語を学ぶ上で基本的に修得すべき事項が減少しているわけでもないからである。外国語教育の現場に立つ者が抱くジレンマはよく理解できるが、安易な妥協と諦めが大学における外国語教育の水準を低下させてしまう恐れは、現実のものとなりつつあるように思われてならない。

近年、好評を博している朝鮮語教科書類は、学生に負担感を感じさせないよう工夫が凝らされている。そこからは、文法事項・文型の提示を最小限に抑制し、練習をつうじてこれらをマスターさせようとする意図が読み取れる。現代の教育現場における苦渋の経験が、こうした教

材を生み出すに至ったことも良く理解できる。

しかし、基礎教育段階で必ず教授すべき事項をたくさん積み残したまま、尻切れとんぼのような内容構成になっていることは否みようもない。これをどう解決するかは、今後の課題として残されている。

「落ちこぼれ」の続出を恐れるあまり、適当な線でお茶を濁すのは、本当に学びたいと思っている学生にとっては迷惑千万である。そして、大学の授業で用いられる教科書は、「朝鮮語ってこんなものだ」と示すだけの、スーパーの試食品まがいの水準で妥協してはならない。今後、基本的に教授すべき事項を削ぎ落とすことなく、効率的に盛り込み得るような教材の研究開発を進めなければならない。

第3節　分析対象とした朝鮮語学習書

本章では、日本で出版されている朝鮮語学習書分析の第一歩として、どの本でも最初に記述される「文字と発音」について、とりわけ母音に関する記述部分を取り上げ、批判的検討を加えようと思う。

ところで、音声学・音韻論、朝鮮文字（ハングル）創製の原理、朝鮮語音韻史などをほとんど学ばなかったと思われる人々によって書かれたものは、「文字と発音」という学習書の冒頭部分から記述上の矛盾と混乱に陥っている。これは朝鮮語学習の最初のステップから、学習者に困惑を強いるものとなりかねない。以下、こうした問題点を具体的に指摘していきたいと考える。

分析対象とした朝鮮語学習書（「学習書」には含めがたいが、辞書や会話集も含めておいた）のリストは以下の通りである。（各文献名の頭に、略号を付した。括弧内の数字は西暦下二桁の出版年度）　これらの中には、アマチュア趣味の域を脱しないものも含まれている。これも現代における朝鮮語学習書のレベルや、これに関わる出版界の一端をうかがわせるものでもあるので、敢えて分析対象に含めることにした。

＜分析対象とした朝鮮語学習書＞

石原・青山（62）『朝鮮語の学習』石原六三・青山秀夫、養徳社

宋枝学（62）『基礎朝鮮語』宋枝学、大学書林

石原・青山（63）『朝鮮語四週間』石原六三・青山秀夫編著、河野六郎監修、大学書林

天理（68）『現代朝鮮語辞典』天理大学朝鮮語学科研究室、天理大学出版部

朴成媛（72）『標準韓国語Ⅰ 基礎・会話編』朴成媛、高麗書店

高麗（72）『韓日辞典』金素雲、高麗書林

金淑子（73）『標準韓国語会話 入門・実用編』金淑子著・李崇寧監修、高麗書林

朴点水（75）『朝鮮語入門 発音編』朴点水、朝鮮新報社

金忠植（75）『英語対照韓国語会話』金忠植、大学書林

金貞淑・朴聖雨（77）『韓国語教本』金貞淑・朴聖雨、筑波大学韓国語語学研究会

朝鮮青年社(77)『朝鮮語　基礎から会話まで』朝鮮青年社出版部編、朝鮮青年社

ＬＲＡ（78）『mini 海外旅行会話　韓国語』Language Research Associates 編、語研

ＫＬＳ（78）『韓国語会話1－1』コリアンランゲージサービス編集部編、サンケイ新聞社

石原・安田（78）『韓国語会話の友』石原六三・安田吉実、養徳社

金淑子（79）『韓国語入門』金淑子、高麗書院

梁昊淵（79）『韓国語講座Ⅰ　初級用』梁昊淵著・河野六郎監修、高麗書林

菅野（81）『朝鮮語の入門』菅野裕臣、白水社

李応寿（81）『やさしい韓国語講座』李応寿、語研

梶井（82）『わかる朝鮮語』梶井陟、三省堂

青山・油谷（82）『朝鮮語基礎1500語』青山秀

夫・油谷幸利、大学書林
金容権（83）『ハングルの決まり文句』、金容権、南雲堂
塚本（勲）（83）『朝鮮語入門』塚本勲、岩波書店
金裕鴻（84）『トラベル韓国語会話手帳』金裕鴻、語研
ＪＩＣＣ（85）『別冊宝島ハングルの練習問題』、ＪＩＣＣ出版局
呉俊東・田代（85）『韓国語会話ミニ辞典』、呉俊東・田代竜一、南雲堂
梅田（85）『ＮＨＫハングル入門』梅田博之、日本放送出版協会
柳尚熙・呉英元（85）『やさしいコリア語入門』柳尚熙・呉英元、評論社
姜求栄（85）『入門ハングル　文法と会話』姜求栄、南雲堂
金容権（86）『ハングルの初歩の初歩』、金容権、南雲堂
呉俊東（86）『写真で入門やさしいハングル』呉俊東、南雲堂
早川（86ａ）『エキスプレス朝鮮語』早川嘉春、白水社
早川・丁元泰（86ｂ）『韓国語会話110番－韓国旅行会話編』早川嘉春・丁元泰、旺文社
渡辺（86）『はじめてのハングルレッスン』渡辺吉鎔、講談社
角川（86）『朝鮮語大辞典』、大阪外国語大学朝鮮語研究室、角川書店
金裕鴻（87）『初めて学ぶ韓国語Ｉ』、金裕鴻、語研
金容権（87）『250語でできるやさしい韓国旅行会話』、金容権、白水社
水谷（87）『漢字でわかる韓国語入門』水谷嘉之、祥伝社
青山（87）『基礎朝鮮語』青山秀夫、大学書林
朝鮮語学研究会（87）『朝鮮語を学ぼう』朝鮮語学研究会編著・菅野裕臣監修、三修社
成澤（88）『韓国語会話決まり文句600』成澤勝、語研
中村（88）『ハングル初歩の初歩』中村完、大修館書店
渡辺（88）『基礎ハングル読本－「読む」から「話す」へ－』渡辺吉鎔、日本放送出版協会
野間（88）『길　朝鮮語への道』野間秀樹、有明学術出版社
柳尚熙（88）『やさしく話す韓国語　一口旅行会話』柳尚熙、第三書房
油谷（88）『ハングルの基礎』、油谷幸利、大修館書店
張銀英（88）『韓国語基本単語2000』張銀英、語研
国際（88）『トラベル韓国語会話』国際コミュニケーション研究所、柏伸出版社
コスモス（88）『コスモス朝和辞典』菅野裕臣他、白水社
花本・早川（89）『日英対照の韓国語会話』花本金吾・早川嘉春、旺文社
塚本（勲）・奥田（89）『新しい朝鮮語』塚本勲・奥田一廣、白帝社
梅田・金東俊（89）『スタンダードハングル講座１　入門・会話』梅田博之・金東俊、大修館書店
韓龍茂（90）『ハングル決まり文句選集』、韓龍茂、南雲堂
原谷（90）『これで通じる　はじめての韓国語旅行会話』原谷治美、ナツメ社
崔寛益（90）『朝鮮語読本』崔寛益、彩流社
早川（91）『日本語から学ぶ韓国語会話』早川嘉春、創拓社
韓龍茂（91）『ふりがなハングル会話』韓龍茂、芸林出版
尹宣熙（91）『すぐ使える韓国語会話』尹宣熙、南雲堂フェニックス
金裕鴻（92ａ）『日常ミニミニ韓国語会話』金裕鴻、語研

金裕鴻（92ｂ）『易しい韓国語会話入門』金裕鴻、金園社
文京洙（92）『ハングル教本』文京洙、新幹社
ＪＴＢ（92）『ひとり歩きの韓国語自遊自在』ＪＴＢ
海野・大原（93）『わたしの韓国語自修法』海野和三郎・大原荘司、東京書籍株式会社
韓先熙・金幸子（93）『はじめての韓国語－カ・ナ・ダ・ラ　ハングル』韓先熙・金幸子、明石書店
高島（93）『書いて覚える初級朝鮮語』高島淑郎、白水社
油谷（93）『ハングル初級』油谷幸利、大修館書店
姜宗出（93）『教育院の総合的な韓国語（上）』姜宗出、新潟韓国学院
尹宣熙（93）『すぐわかるハングル文法』尹宣熙、南雲堂
小学館（93）『朝鮮語辞典』油谷利幸他、小学館
岡山（94）『朝鮮語を学ぶ』岡山善一郎、白帝社
韓龍茂（94）『ハングル基本会話』韓龍茂、白帝社
洪潤基（94）『標準韓国語教本』洪潤基、ハンリム出版社（白帝社発売）
高木（94）『漢字で入門　ハングル読本』高木亮一、南雲堂フェニックス
早川（94）『メモ式朝鮮語早わかり』早川嘉春、三修社
渡辺（94）『ＮＨＫラジオハングル講座』テキスト、渡辺吉鎔、日本放送出版協会
梁昊淵（94）『韓国語の初歩』梁昊淵、高麗書林
鄭和子（94）『ひとり旅これで十分韓国語会話』鄭和子、実業之日本社
金裕鴻（95）『ＮＨＫラジオハングル講座』テキスト、金裕鴻、日本放送出版協会
権在淑（95）『表現が広がるこれからの朝鮮語』権在淑、三修社
松原・金延宣（95）『ポイントレッスン入門韓国語』松原孝俊・金延宣、東方書店
大村・権泰日（95）『わかりやすい朝鮮語の基礎』大村益夫・権泰日、東洋書店
姜奉植著（95）『韓国語会話入門』姜奉植著・徐廷範監修、東方書店
地球（95）『地球の歩き方　旅の会話集　韓国語/英語』地球の歩き方編集室、ダイヤモンド・ビッグ社
金裕鴻（96）『金（キム）さんのはじめての韓国語』金裕鴻、明日香出版社
呉英元（96）『コミュニケーション韓国語Ⅰ（入門編）』呉英元、第三書房
塚本（秀）・岸田・藤井・植田（96）（『グローバル朝鮮語』塚本秀樹・岸田文隆・藤井幸之助・植田晃次、くろしお出版
油谷（96）『朝鮮語入門』油谷幸利、ひつじ書房
ＰＯ（96）『旅行韓国語ハンディーブック』Peak One 編著、西東社
姜奉植（96）『日本人のためのアンニョンハシムニカ韓国語入門』姜奉植、国書刊行会
ＭＥＭＯ（97）『韓国語ミニフレーズ７パターン』、ＭＥＭＯランダム編、三修社
金東漢（97）『韓国語基本単語＋2000』金東漢、語研
原谷（97ａ）『らくらく話せる韓国語の初歩』原谷治美、日本実業出版社
原谷（97ｂ）『ＮＨＫ初めての韓国旅行会話』、原谷治美、日本放送出版協会
曽我・池貞姫（97）『使える朝鮮語』曽我祐典・池貞姫、白水社
李允希・小島（97）『すぐ使える！短い韓国語表現2002』李允希・小島ミナ、実務教育出版
金浪洙（97）『ＳＳ式すぐに話せる！韓国語』金浪洙、UNICOM. INC.
油谷（97）『ＮＨＫラジオハングル講座』テキスト、油谷幸利、日本放送出版協会
李廣善（97）『すぐに役立つ韓国語会話』李廣善、成美堂出版

塩田（98ａ）『語学王　韓国語』塩田今日子、三修社
塩田（98ｂ）『こうすれば話せるハングル』塩田今日子、朝日出版社
韓誠（98）『韓国語が面白いほど身に付く本』韓誠、中経出版
金貞淑・宋連玉（98）『ハングルを学ぼう基礎編』金貞淑・宋連玉、白帝社
金裕鴻（98）『金先生のやさしい韓国語入門』金裕鴻、金園社
塚本（勲）・長谷川（98）『入門者のための朝鮮語講座』塚本勲・長谷川由紀子、白帝社
白川（98）『これならわかる！朝鮮語』白川豊・白川春子、白水社
朴勇俊（98）『そのまま使える韓国語会話』朴勇俊、南雲堂
辛南妃・李ジェウク（98）『韓国語の日常基本単語集』辛南妃・李ジェウク、ナツメ社
柳尚熙（98）『歌でおぼえる韓国語』柳尚熙、茅ヶ崎出版
李昌圭（98）『耳で覚えるはじめての韓国語』李昌圭、ナツメ社
早川（98）『ＮＨＫラジオハングル講座』テキスト、早川嘉春、日本放送出版協会
木内（98）『今すぐ話せる韓国語入門編』木内明、東進ブックス（株式会社ナガセ発行）
許秦（98）『カタカナで覚える!!　韓国語会話』許秦、金園社
ＪＴＢ（98）『コミック韓国語会話』ＪＴＢ出版事業局編集六部、ＪＴＢ
金東漢・張銀英（99）『韓国語レッスン初級１』金東漢・張銀英、スリーエーネットワーク
今井（99）『韓国語の散歩道』今井久美雄、アルク
松原・金延宣・黄聖媛（99）『ポイントレッスン入門韓国語改訂版』松原孝俊・金延宣・黄聖媛、東方書店
野間（99）『暮らしの単語集　韓国語』野間秀樹、ナツメ社
生越（99）『ＮＨＫラジオハングル講座』テキスト、生越直樹、日本放送出版協会
黒澤（99）『３語で話せる韓国語会話』黒澤眞爾、サンマーク出版
原谷（99）『韓国語旅行会話集』原谷治美、ナツメ社
金裕鴻（99ａ）『しっかり学ぶ韓国語』金裕鴻、ベレ出版
金裕鴻（99ｂ）『絵でわかる韓国語基本単語2000』金裕鴻、明日香出版社
鄭銀淑（99）『いちばんやさしい韓国旅行会話ハンドブック』鄭銀淑、池田書店
小倉紀蔵（99）『最もシンプルな韓国語マニュアル』小倉紀蔵、アルク
原谷（99）「これで初級はマスター！韓国語入門」（『韓国語をものにするためのカタログ2000年度版』、104頁～152頁所収）、原谷治美、アルク
ＭＬ（99）『韓国語イキイキ表現初級』マルチリンガル編集部、アルク
林昌奎・李鐘姫（00）『韓国語超入門』林昌奎・李鐘姫、アルク

第４節　朝鮮語の母音

朝鮮語学習書の分析に先立ち、まず韓国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）における発音規範（標準発音）を概観しておく必要があるだろう。特に、母音ㅚ /we/（または /ø /）、ㅟ /wi/（または /y/）、ㅢ /ωj/（または / ω i/、/ωi/）について（とりわけㅢを重点的に）考察することにする。

4－1．韓国における発音規範

韓国における現行発音規範[3]は、朝鮮語の単母音は10母音からなる体系をなすものと規定している。また、「ㅚ /ø/、ㅟ /y/ はそれぞれ二重母音ㅚ /we/、ㅟ /wi/[4] と発音することができる」

として、異音としての二重母音で発音することを認めている。[5] そして、多くの朝鮮語生得話者が母音ㅚ、ㅟを基本的に二重母音 /we/、/wi/ で発音している現実からすれば、第二言語としての朝鮮語学習においては、これらが単母音で発音されることがあるという情報は伝えても、敢えて発音の難しい単母音ㅚ /ø/、ㅟ /y/ の方を基本にして教育しなくても良いと思われる。

北朝鮮の現行発音規範である『朝鮮語規範集』(1988) の「文化語発音法」第3項は「ㅚ、ㅟはどのような位置でも単母音で発音する」と規定している。[6] 日本では北朝鮮の言語規範に準拠する教育が朝鮮総連を中心に行なわれており、朝鮮語を学ぶ日本人に対してはさほどの影響力はないにしても、この規定を全く無視するわけにはいかないだろう。しかし、日本の大学教育では、ㅚ・ㅟを基本的には二重母音で発音するように指導する方が、韓国の人々との交流が盛んな日本の現実により適合しているだろう。

また、ㅚは単母音 /ø/、ㅟは二重母音 /wi/ として扱って、9母音体系が立てられることもある。[7] さらに、韓国で出版された第二言語としての朝鮮語学習書などではㅚ、ㅟともに二重母音 /we/、/wi/ として扱う8母音体系を採るものも見られる。[8] さらに、ㅓに半高中舌母音 /ə/ と半低後舌母音 /ɔ/ の二通りの音素を認めて、前者の8母音をもとにした9母音体系を採るものも見られる。[9]

二重母音に関しては、韓国の現行発音規範は11個あるとしている。このうち、ㅢについては、「ただし、単語の第1音節以外のㅢは /i/ で、助詞의は /e/ で発音することを許容する。」[10] としている。母音音素としては、このほかに半母音 /j/、/w/ が上げられる。また、母音ㅢが上昇二重母音の［ɯi］であるとするならば、[11] /ɯ/ も半母音の音素として認められることになる。

これらを整理すると、韓国における規範的な母音リストは以下のようになる。

＜単母音＞（10個）ㅏ /a/、ㅐ /ɛ/、ㅓ /ɔ/、ㅔ /e/、ㅗ /o/、ㅚ /ø/、ㅜ /u/、ㅟ /y/、ㅡ /ɯ/、ㅣ /i/
＜二重母音＞（11個）ㅑ /ja/、ㅒ /jɛ/、ㅕ /jɔ/、ㅖ /je/、ㅘ /wa/、ㅙ /wɛ/、ㅛ /jo/、ㅝ /wɔ/、ㅞ /we/、ㅠ /ju/、ㅢ /ɯi/（または /ɯj/）[12]
＜半母音＞（2個～3個）/j/、/w/、（/ɯ/）

4－2. 北朝鮮における発音規範

北朝鮮における規範的な母音リストは以下のようになっている。

＜単母音＞（10個）ㅏ /a/、ㅐ /ɛ/、ㅓ /ɔ/、ㅔ /e/、ㅗ /o/、ㅚ /ø/、ㅜ /u/、ㅟ /y/、ㅡ /ɯ/、ㅣ /i/
＜半母音を伴う二重母音＞（10個）ㅑ /ja/、ㅒ /jɛ/、ㅕ /jɔ/、ㅖ /je/、ㅘ /wa/、ㅙ /wɛ/、ㅛ /jo/、ㅝ /wɔ/、ㅞ /we/、ㅠ /ju/
＜純粋な二重母音＞（1個）ㅢ /ɯi/
半母音（2個）……/j/、/w/[13]

韓国の場合と同様、北朝鮮においても10母音体系を規範としている。ただし、「ㅚ、ㅟはいかなる位置でも単母音で発音する」[14] と規定し、二重母音での発音を認めていない点が、韓国の発音規範とは異なる点である。

二重母音についても、韓国と同様11個あるとしている。しかし、二重母音ㅢをどう見るかについては、韓国の規範とは大きく異なる。北朝鮮の現行『朝鮮語規範集』(1988年) の「文化語発音法」第2項で「ㅢは二重母音として発音することを原則とする。」と規定し、その「付則」において「1）濃音子音と結合するとき、および語中や語末にあるㅢは /i/ のように発音することを許容する。2）属格助詞（原文は속격토）で用いられる場合、時には /e/ のように発音することを許容する。」としている。これは、韓国の現行「標準発音法」第5項の規定と比べても「濃音子音と結合するとき…」の部分が、韓国の規定では「子音を頭音に持つ音節のㅢは /i/ と発

音する」となっているところが違うだけで、ほかは大差ないといえる。なお、1966年の北朝鮮の『朝鮮語規範集』では、現行『朝鮮語規範集』(1988年)にある「付則」は付されていない。

問題は、韓国ではㅢを他の二重母音と同じように、半母音と単母音の結合と見る見解が多数派を占めているのに対し、北朝鮮では二つの「完全な母音」が同一音節内で結合した、他の二重母音とは本質的に異なるものと見なしている点にある。

4−3. 北朝鮮における二重母音ㅢの規範的音価について

北朝鮮においては、二重母音体系を記述するとき、ㅢは他の二重母音と性質を異にするものとして、特別に扱われている。そこで、まず北朝鮮において母音ㅢがどのように見なされてきたかについて、若干の例を概観することにする。[15]

『朝鮮語文法1 (語音論・形態論』(1960年)

水平的(原文は「並行的」)二重母音。[16]

『朝鮮語　教員大学用』(1970年)

/ω/＋半母音/j/。[17]

『朝鮮語文法』(1970年)

短い/i/(짧은　ㅣ)で終わる二重母音(/ωi/)。

『朝鮮語規範集解説』(1971年)

/ω/と/i/が一音節内で続けて発音される二重母音。

『文化語文法規範(草稿)』(1972年)・『朝鮮文化語文法規範』(1976年)

先行する母音要素が一/ω/の二重母音。[18]

「朝鮮語母音体系問題」(1987年)

/j/後続二重母音(表記上は二重母音だが、実際には二重母音の音価を持たないと明言している。)[19]

『朝鮮語語音論研究』(1995年)

/ωi/。二つの母音が結合した二重母音。

北朝鮮では二重母音ㅢの音価をめぐって、以下に示すような韓国では見られない見解が示されている。

「重母音のなかにはいくつかの種類がある。純粋な意味での重母音は、完全な母音(온전한 모음)二つ以上が一つの音節内で続けて発音されるものである。このような観点から見れば、朝鮮語には重母音はㅢ/ωi/一つしかない。その他10個の重母音は純粋な重母音ではない。それは完全な母音の前で発音される要素が完全な母音ではないからである。そうした点から、このような重母音を重母音的なもの、あるいは準重母音とも言う。」、「この重母音は他の国の発音には別に見られない独特な発音である。母音ㅢ/ωi/は/ω/と/i/が一つの音節内で互いに結びつく重母音である。」[20]

ここで言う「純粋な意味での重母音は、完全な母音二つ以上が一つの音節内で続けて発音されるものである」という主張が、一般音声学から考えて妥当性を有するか否かについては議論のあるところである。

重母音は複数の母音が同一音節内で結合するものであって、そのうちの一つの母音は音節の核をなす成節音で、もう一方の母音は半母音となり、音節主音と音節副音という形での主従関係が存在するものと、音声学では理解されている。

北朝鮮の規範文法書[21]も、上記の如き一般音声学の理解に違うことなく、「音節はもっとも良く響く音を中心にして、その前後に他の音を伴っているのが一般的な形式である。だから、響きの大きな母音が音節の中心に来て、子音がその前後に結合している。音節の中心をなす音を成節音と言う」と述べている。したがって、二つの単母音の結合からなる音節である「純粋な重母音」であるとするㅢ/ωi/は、「他の国の発

音には別に見られない独特な発音」であると説明せざるを得なくなっていると思われる。

北朝鮮で言われるように、「純粋な意味での重母音ㅢ」が半母音ではない二つの「完全な母音」が同一音節内で続けて発音される /ωi/ だとするなら、1音節内に二つの成節音が存在することとなり、したがって音節核の問題はどのように処理されるのかという問題が残る。[22]

この問題に対して、「二重母音ㅢにあっては、最初の（母音）要素と2番目の（母音）要素が両者ともに成節的役割を果たす。そのためㅢは水平的（原文は「並行的」）重母音であるといえる。」[23] という主張がなされているが、「成節的役割を果たす」（音節核になりうる）母音が「完全な母音」として隣接するのであれば、その間には音節境界が存在するはずであり、したがって二重母音ではなく2音節間の母音隣接（hiatus）ではないのかという疑問が生じる。

この問題と関連するが、金ソングン（1995：54頁～55頁）は二重母音ㅢの二つの母音は音節核を形成する能力を有してはいるが、実際にはどちらか一方だけが音節主音となり、もう一方の母音は音節を形成する上で補助的機能を果たすだけであると論じている。この説明だと、一般音声学の音節概念との矛盾はない。しかし一方では、「의학」（医学）という単語を音響音声学的実験で調べた結果、母音ㅡ /ω/ と母音ㅣ /i/ の強さ（振幅）と気音の周波数（振動数）はほとんど同じだとして、의は語頭に来るとき「水平的二重母音」の音価を有すると結論付けている。これでは、依然として母音隣接の可能性は排除できないように思われる。[24]

しかしながら、もしㅢに含まれる二つの母音が両者とも「完全な母音」であって、2つの音節間での母音隣接ではないとするなら、一般音声学の音節概念では説明できなくなる。したがって、「外国（の言語）にはない」特別な音価を提示しなければならなくなり、発音法の説明にも苦慮せざるを得なくなっているのではないだろうか。この特別な音価をㅢに認めた結果、まるで外国語の発音を説明するかのような調子で、ㅢの発音においては音節境界を置かないように「発音教育」をしなければならないという主張がなされるに至った。以下はその例である。

「この条項（『朝鮮語規範集』（1966年）の「標準発音法」第2項―引用者注）で明らかにされたように、ㅢは重母音で発音する。重母音で発音するということは、互いに異なる音が同一音節内で続けて発音されることを意味する。だから、母音ㅢは最初 / ω / で発音し、引き続いて /i/ を発音しなければならない。」（『朝鮮語規範集解説』、1971年、261頁）

二重母音ㅢに関する北朝鮮の「標準発音法」において、特に議論になりそうな点は以下の部分である。

「ここで注意しなければならない点は、このような発音を同一音節内で非常に短い時間に滑らかに出すようにすることである。そうしないで / ω / と /i/ を互いに別の母音のように途切れて聞こえるように発音すれば、一つの母音のようには感じられず、ぎこちなくなる。また、前の部分の /ω/、または後ろの部分の /i/ だけが際立って聞こえるように発音してもならない。重母音で発音するが、ㅢの中にあるㅡ、ㅣを短く、そして滑らかにつなげることが必要である。」（同上書、同頁）

ここで、/ω/ と /i/ が途切れて聞こえるように発音すれば、一つの母音のようには感じられないと言っている部分は、母音隣接にならないように発音に注意しろということを意味している。二重母音は、本来その内部に音節境界（途切れて聞こえる音の境目）を持ち得ないのであり、もし音節境界が存在する母音隣接なら、これは二つの音節から構成された母音の連続ということになってしまうからである。[25]

4−4. 北朝鮮におけるㅢの規範的音価に対する異見

北朝鮮における二重母音ㅢに関する議論でもっとも注目されるのは、『言語学論文集7』(1987年)の巻頭に掲載された金ペクリョンの論文「朝鮮語母音体系問題」である。

金ペクリョンは、政策的にㅢを二つの「完全な母音」が1音節を形成する「純粋な二重母音」であるという解釈のもとに進められる北朝鮮における言語規範化政策に対して、次のように自己の言語学的見解を披瀝している。

「今日、重母音ないし単母音としてのㅢは一部の方言区域に限って、しかも年老の伝統的方言所有者のなかに部分的に残っているだけだ。このように、/j/後続二重母音であるㅢは/j/後続二重母音の類型に属する他の二重母音のように、単母音に発達したあと、(調音)位置の関係上、不安定性ゆえにその位置を守り通せず、それ以前の母音である/i/と/ω/に逆戻りしてしまう方向で消えてしまったのであり、実際に存在しているのは、合成字母ㅢとその字母の名称としてのㅢだけである。このような字母ㅢが今も書き言葉で用いられているのは、ひとえに正書法の伝統とともに、同音語を弁別しようとする意識的規範化の結果である。このことは、もちろん一定の限界内において必要で、また可能なことである。しかし、発音規範の場合は問題は単純ではない。(中略)言語の現実について見るとき、現代朝鮮語における/i/後続二重母音はㅢしかないが、このことは正確に言って、二重母音というよりは書き言葉で用いられる一つの重字母に過ぎない。」

解放後、北朝鮮における言語政策は、形態主義の貫徹を一つの柱としてきた。それは主に文字表記で支えられるものだが、ㅢの発音の問題(ㅟ、ㅙの発音問題も同様)をめぐって、元来ほとんどの人々が(あるいは誰ひとりとして)自己の発音レパートリーとして持っていなかったはずの音を文化語発音として「教育」し、この綴り字発音(spelling pronunciation、literary pronunciation)を通じた形態音素主義の徹底を図っているかのようである。次の主張は、そうしたものの一つである。

「……それは方言にㅢ/ωi/の発音がないからだ。文化語ㅢ/ωi/は方言では/i/、もしくは/ω/と発音される。したがって文化語教育でㅢ/ωi/の発音を十分に教えることが大切である。」(金ジンチョル「咸鏡道方言 抑揚에서의 말소리 느낌에 대하여」『朝鮮語文』1994年第3号、40頁)

この綴り字発音の試みは、発音においても言語形態の示差性を高めようとする政策だといえる。

形態的相違を表記のみならず、発音においても弁別可能性を徹底させるために、文法形態素としてのㅢの発音における示差性を確保させるための、次のような発音教育が主張されてもいる。

「(二重母音ㅢは—引用者注)属格助詞の場合は(会話において)最初の要素と2番目の要素が融合して/e/に近く発音されもする。しかし、属格助詞ㅢ/e/は与格助詞(原文は대격토、すなわち対格助詞となっているが、これは여격토、すなわち与格助詞の誤り—引用者注)ㅔ/e/と顕著に区別されなければならない。だからㅢが属格助詞として用いられるときはポーズ(休止)を置かないようにしなければならず、(与格助詞の—引用者注)ㅔ/e/よりも短くなければならない。」(李サンビョク、1966年、32頁)

金ペクリョンがㅢについて「書き言葉で用いられる二重字母」に過ぎないと主張している点は、こうした行き過ぎとも思える言語政策に対する批判を伴うものと読み取ることが出来る。

以上概観したように、南北朝鮮における母音の音価に関する理論的・言語政策的相違は、現代朝鮮語における母音体系の揺れを反映したものでもあるが、このことが日本における朝鮮語

教育にも影響を及ぼし、「文字と発音」教育における若干の混迷をもたらす一つの要因となっている。ほとんどの場合、日本における朝鮮語教育は韓国の言語規範に準拠して行なわれてはいるが、北朝鮮の言語規範を政策的に排除統制する特別な理由も存在しないため、問題はより複雑にならざるを得ない面も見られる。

金ピョンジェは、『朝鮮語方言学概要』(1959年)において、二重母音ㅢが方言よって/ω/や/i/で発音されるのは、主にアクセント(소리마루)によって左右される場合が多く、前部音にアクセントがくれば/ω/となり、後部音にアクセントがくれば/i/となると指摘した。(李トンビン「方言研究史」『主体의 朝鮮語研究50年史』所収、236頁)

これは、二つの「完全な母音」が同一音節内で発音されると主張されるㅢが、音韻としては実質的には存在せず、文字表記においてのみ存在するという批判を裏付ける一つの事実である。

第5節 朝鮮語学習書における母音の説明

日本で出版された朝鮮語学習書において、母音の文字と発音がいかに説明されているかについて、21個の母音字、およびその音価が分類される類型別にまとめて、検討を加えることにする。

5−1. 母音字制定の原理に基づく分類

朝鮮文字の制字原理は、文字創製時に出された解説書『訓民正音(解例本)』(1446年)に明記されている。母音字は「天・地・人」を象った3個の基本字を組み合せて作られた「初出字」4個、「再出字」4個の計11個の母音文字群、およびこれらを基にした「合用」と呼ばれる制字原理に沿って作られた「二字合用字」12個、「三字合用字」4個の計16個の母音文字群をもとに2段階にグループ分けされたものである。[26] 以下はそのリストである。

<基本母音字>ㅏ/a/、ㅑ/ja/、ㅓ/ɔ/、ㅕ/jɔ/、/ㅗ/o/、ㅛ/jo/、ㅜ/u/、ㅠ/ju/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/
<合成母音字>ㅐ/ε/、ㅒ/jε/、ㅔ/e/、ㅖ/je/、ㅚ/ø(we)/、ㅟ/y(wi)/、ㅢ/ωi/(または/ωj/)、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/wε/、ㅞ/we/

韓国、北朝鮮ともに、この分類に従った字母排列がなされているが、[27] これは、一般言語学における単母音・重母音という音素論的な分析に基づく母音の分類とは一致しない。

朝鮮文字創製者たちは、半母音/j/を伴う上昇二重母音/jo/、/ja/、/ju/、/jɔ/に対して、「再出」した文字として独自な文字「ㅛ、ㅑ、ㅠ、ㅕ」を与えた。一方、/aj/など半母音/j/を伴う下降二重母音や、/wa/など半母音/w/を伴う上昇二重母音に対しては独自な文字を与えず、文字の「合用」という制字原理を適用した。金ペクリョン(1997:42頁)は、その理由を次のように説明している。

「ㅛ/jo/、ㅑ/ja/、ㅠ/ju/、ㅕ/jɔ/の類いの字母が別個に創製されたのは、それが一つの音韻単位としての自立性が強かったためで、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/の類いに対して別個の字母を作らなかったのは、ひとつの音韻単位という感じがそれより弱かったためだ。」

「/wa/、/wɔ/は二重母音である特性が顕著に維持されていたために、別個の文字は作られなかった。」(同上書:43頁)

また、李基文(1980:98頁)もこの問題について次のように言及している。

「ㅛ/jo/、ㅑ/ja/、ㅠ/ju/、ㅕ/jɔ/をㅣ/i/とㅗ/o/・ㅏ/a/・ㅜ/u/・ㅓ/ɔ/音の複合と見ながらも、これらを「合用」で表さないで単一文字で表したのは、解例本編纂者たちがㅛ、ㅑ、ㅠ、ㅕはちょうどㅌ/th/がㄷ/t/に「(声が)強い」という資質が付け加わったものと見たように、ㅗ/o/、ㅏ/a/、ㅜ/u/、ㅓ/ɔ/に「起於ㅣ」(/i/よ

り始まって）という資質が付け加わったものと認識していたことを物語っていると解釈される。[28] したがって、当時の学者たちの認識においては、これらは一つの音だったのである。」

さらに李基文（1980：99頁）は、「根本的に、これら二重母音に対する訓民正音解例本編纂者たちの認識に一貫性がなかったものと見なければならないだろう」と批判的に考えている。

このように、朝鮮文字創製者たちは朝鮮語の音韻体系に対する音素論的分析に不十分性を抱えていた結果、今日私たちが言うところの「基本母音字」（『訓民正音解例本』の「制字解」で取り上げられている母音字）のなかに、音素論的にみれば、単母音と二重母音が混在する結果となっている。

また、いわゆる合成母音字（『訓民正音解例本』の「中声解」で取り上げられている母音字）は、朝鮮文字創製当時は全て重母音であったが、その後の歴史的音韻変化によって、/j/ 後続下降二重母音であったㅚ /oj/、ㅟ /uj/、ㅐ /aj/、ㅔ /ɔj/ が単母音化した。[29] そして更に、ㅚ、ㅟはその後、/w/ 先行上昇二重母音に変化する過程を歩んできた。

こうした歴史的音韻変化の結果、今日、「合成母音字」のなかにも単母音と二重母音が混在するようになっている。

上述したような朝鮮文字の制字原理と歴史的音韻変化によって生じた、「基本母音字」・「合成母音字」という枠組みにおける音素論的体系性の欠如は、朝鮮語教材を編集するにあたっても明確に認識されていなければならない。

『한글맞춤법（ハングル正書法）』（1988年、韓国）、『조선말규범집（朝鮮語規範集）』（1988年、朝鮮民主主義人民共和国）ともに、「文字の排列順序とその名称」、および「文字の発音」を別々に取り扱っているのも、制字原理と文字の発音が必ずしも対応関係にないことを意識してのことである。

ところで、日本で出版されている朝鮮語学習書を見ると、その多くは「基本母音字」10個と「合成母音字」11個という分類に基づき、母音字の発音解説がなされている。しかし、この分類に基づく母音字の発音解説が母音字の制字原理との間に混乱を引き起こしている例が多く見られることは、以下の本章第4節で述べる通りである。

日本で出版された朝鮮語学習書のうち、以下に掲げるものが、母音字の制字原理に基づく分類法に従って母音字とその音価の説明を行なっている。なお、それぞれの学習書で用いられている母音を指し示す用語を【　】内に示しておいた。

早川（94・98）、金東漢・張銀英（99）、油谷（88・93）、塚本（秀）・岸田・藤井・植田（96）、松原・金延宣（95）、成澤（88）、曽我・池貞姫（97）、花本・早川（89）、張銀英（88）、鄭銀淑（99）【基本母音字・合成母音字】、塚本（勲）（83）【基本母音字母・2重母音字母、3重母音字母】、石原・安田（78）【基本形母音字母（中声）・複合形母音字母（重中声）】、白川（98）【基本的な母音字・複合母音（字）】、早川（91）【基本母音文字・基本子音文字。発音解説では「単母音・半母音・二重母音」という分類も示している】、早川（86 a）【基本的母音字と半母音 /j/ の入った字形・合成母音字と半母音 /w/】、高島（93）【基本母音字・複合（合成）母音字】、中村（88）【母音の基本字・合成字】、梁昊淵（94）【基本文字・拡大文字】、青山・油谷（82）【基本字母・複合字母】、石原・青山（63）、角川（87）【単母音字・重母音字】、大村・権泰日（95）【単母音字・複合母音字。10個の単母音からなる母音体系も示されている】、金淑子（79）【単母音字・二重母音字】、天理（68）【単形母音字・重形母音字】、石原・青山（62）【単一形母音字・複合形母音字】、林昌奎・李鐘姫（00）【基礎母

音・合成母音】、菅野（81）、金東漢（97）、早川・丁元泰（86）【母音字・合成母音字】、青山（87）【母音字母・合成母音字母】、李応寿（81）【母音字・これらの組み合わせ】、岡山（94）、原谷（97ｂ・99）、渡辺（94）、国際（88）、地球（95）、小倉（99）【基本母音・合成母音】、塚本（勲）・奥田（89）、原谷（90・99）【基本母音・重母音】、ＭＬ（에、ㅐを複母音でもない母音とし、基本母音および에、ㅐの複合から複母音が形成されると説明している。）【基本母音・複母音】、原谷（97ａ）【基本母音・重母音、合成母音】、姜宗出（93）、木内（98）【基本母音・二重母音】、ＪＩＣＣ出版局（85）、金容権（86）、許秦（98）【基本母音・複合形母音】、金容権（87）【基本形・複合形】、金裕鴻（87）ＰＯ（96）、呉俊東・田代（86）【基本形母音・複合形母音】、韓先熙・金幸子（93）【基本の母音・二重母音】、呉俊東【基本形の母音・複合母音】、梁昊淵（79）【単母音・二重母音】、韓龍茂（91）【単母音・複合母音】、ＭＥＭＯ（97）【単純母音・複合母音】、金裕鴻（84・92ａ・92ｂ・95・96・98・99ａ・99ｂ）、渡辺（88）【縦母音、横母音・合成母音字】、姜求栄（85）【中声母音・二重（半）母音】、金容権（83）、ＪＴＢ（92・98）【母音・複合母音】、尹宣熙（91）【母音・二重母音】、ＬＲＡ（78）【母音・特殊な二重母音】、金浪洙（97）【母音・合成母音】、鄭和子（94）【母音・複母音】

5－2．単母音８個・重母音13個への分類

＜母音＞ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ε/、ㅔ/e/

＜二重母音＞ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、ㅒ/jε/、ㅖ/je/、ㅚ/we/、ㅟ/wi/、ㅢ/ωi/（または/ωj/）、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/wε/、ㅞ/we/

以下の学習書において、この分類に基づく説明がなされている。

姜奉植著（95）【単母音・重母音】、油谷（96）【単母音・半母音が加わった音】、油谷（97）【単母音・半母音を含めた母音・二重母音】、李昌圭（98）【単母音・二重母音。文字解説部分では基本母音字・合成母音字としている】、塚本（勲）・長谷川（98）【単母音字母・重母音字母】、塩田（98ａ）【母音・合成母音】、梅田（85）【母音・半母音のついた母音】、朝鮮語学研究会（87）【母音・二重母音については特に用語を用いていない】、梅田・金東俊（89）【母音・二重母音については、「半母音ｊ・ｗが母音の前につく」という表現を用いている】、早川（91）【母音・「半母音ｊ・ｗと結びつく母音」】、生越（99）【母音・重母音】、文京洙（92）【単母音については特に用語を用いていない・二重母音については「半母音の入った母音」としている】

5－3．単母音10個・二重母音11個への分類

＜単母音＞ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ε/、ㅔ/e/、ㅚ/ø/、ㅟ/y/

＜二重母音＞ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、ㅒ/jε/、ㅖ/je/、ㅢ/ωi（または/ωj/）、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/wε/、ㅞ/we/

以下の学習書においてこの説明法が採られている。

柳尚熙・呉英元（85）、大村・権泰日（95）【単母音・複合母音】、呉英元（96）、朴点水（75）、韓誠（98）【単母音・二重母音】、金忠植（75）（ㅟは二重母音でも発音するとしている）、梶井（82）、崔寛益（90）、水谷（87）【単母音・重母音】、金貞淑・朴聖雨（77）（母音字制定の原理に基づく基本母音10個、複合母音11個も説明している）、高麗（72）【単母音・複母音】

5－4．単母音８個・「半母音＋単母音」12個・「二重母音」１個への分類

＜単母音＞ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ε/、ㅔ/e/

＜「半母音＋単母音」＞ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、

ㅠ/ju/、ㅐ/jɛ/、ㅔ/je/、ㅚ/we/、ㅟ/wi/、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/wɛ/、ㅞ/we/

<「二重母音」>ㅢ/ωi/

以下の学習書においてこの説明法が採られている。

権在淑（95）、松原・金延宣・黄聖媛（99）、小学館（93）【単母音・「半母音＋単母音」・二重母音】、野間（99）【単母音・半母音を持つ字母・二重母音】、野間（88）、早川（91）【単母音・半母音・二重母音】、コスモス（88）【母音・半母音＋「母音」・二重母音】、塚本（秀）・岸田・藤井・植田（96）【単母音・yのつくもの、wのつくもの・二重母音。ただし、母音字制定の原理に基づく基本母音字10個、合成母音字11個についても説明している】

ㅢのみを二重母音として特別扱いする分類法は、北朝鮮で特徴的に見られるものである。この分類法を採用した朝鮮語学習書は、以下のような二重母音ㅢの発音に関する説明を付している。学習書という性格上詳細な記述を行うには限界もあり、このため二重母音を如何に理論的に把握したものかは明らかでない。二重母音ㅢの音価を朝鮮語学習書では如何に扱うかについて、今後議論されるべき点が残されているだろう。

<小学館（93）>

語頭ではㅢ［ωi］と発音される。

<権在淑（95）>

「ㅡ」と「ㅣ」を組み合わせたㅢ［ωi　ウィ］が唯一の二重母音。

<コスモス（88）>

語頭および母音の後ろにのみ現れる。母音の後ろでは［ωi　ウィ］はしばしば［i　イ］と発音される。

<塚本（秀）・岸田・藤井・植田（96）>

語頭でかつ子音と組み合わさらないとき。의［ωi ウィ］。

<野間（88）>

「ㅡ」と「ㅣ」を組み合わせたㅢ［ωi　ウィ］。語頭のみㅢ［ωi］と発音される。

<早川（91）>

ㅢ［ウィ］。日本語のウとイを連続してすばやく発音する。朝鮮語で唯一の二重母音。

<宋枝学（62）>

これは「ㅡ」を発音してすぐ「ㅣ」を発音する。日本語の「イ」にやや近い音。

5−5.「単母音」9個・「合成母音」11個・「二重母音」1個への分類

<単母音>ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ɛ/、ㅔ/e/、ㅚ/ø/

<「半母音＋単母音」>ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、ㅐ/jɛ/、ㅔ/je/、ㅟ/wi/、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/wɛ/、ㅞ/we/

<「二重母音」>ㅢ［ωi］

以下の学習書においてこの説明法が採られている。

朴成媛（72）【単母音・半母音jが密着して先行したもの、半母音wをかぶせたもの・二重母音】

5−6.「単母音」10個・「合成母音」10個・「二重母音」1個への分類

<単母音>ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ɛ/、ㅔ/e/、ㅚ/ø/、ㅟ/y/

<合成母音>ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、ㅐ/jɛ/、ㅔ/je/、ㅘ/wa/、ㅝ/wɔ/、ㅙ/jɛ/、ㅞ/we/

<二重母音>ㅢ［ωi］

以下の学習書においてこの説明法が採られている。

宋枝学（62）【単母音・合成母音・二重母音】

5−7.「単母音」9個・二重母音12個への分類

<単母音>ㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅐ/ɛ/、ㅔ/e/、ㅚ/ø/、

<二重母音>ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、

ㅐ /jɛ/、ㅔ /je/、ㅢ / ɯ i/（または /ɯj/）、ㅟ /wi/、ㅘ /wa/、ㅝ /wɔ /、ㅙ /wɛ /、ㅞ /we/

以下の学習書においてこの説明法が採られている。

姜奉植（96）、金忠植（75）（ㅢは二重母音でも発音するとしている）【単母音・重母音】

第６節　母音説明で見られる問題点について

以下、本稿では『訓民正音（解例本）』（1446年）にその淵源を発する母音字制定の原理に基づく母音の分類（前節5－1）をもとに、母音の文字とその音価を説明している朝鮮語学習書の問題点に絞って、批判的分析を加えることにする。これは、母音の説明法においてもっとも問題を孕んでいるところである。

一般言語学では、母音は単母音系列と重母音系列に分けて説明されるのが一般的であるが、朝鮮語学では『訓民正音（解例本）』において見られる母音字制定原理を歴史的に踏襲した形で分類されることがあるという特殊性が見られる。

『訓民正音（解例本）』は、音素論的な意味では単母音と二重母音の区別をなし得ておらず、上述したように、朝鮮語学で言われるところの「基本母音字10字」の中には二重母音も混在している。しかし、以下にリストアップした学習書は、「基本母音字」・「合成母音字」を取り上げる際に、その用語に「字・文字・字母」といった語を付していない。

金裕鴻（84・92ａ・92ｂ・95・96・98・99ａ・99ｂ）、岡山（94）、原谷（97ｂ・99）、渡辺（94）、国際（88）、地球（95）、小倉（99）【基本母音・合成母音】、韓龍茂（90・94）、今井（99）、金貞淑・宋連玉（98）朴成媛（72）、尹宣熙（93）、金淑子（73）、朴勇俊（98）、李允希・小島（97）、金容権（94）、ＫＬＳ（78）、金裕鴻（87）、柳尚熙（88）、李廣善（97）、辛南妃・李ジェウク（98）、柳尚熙（98）、黒澤（99）【基本母音・複合母音】、塚本（勲）・奥田（89）、原谷（90・99）【基本母音・重母音】、原谷（97ａ）【基本母音・重母音、合成母音】、姜求栄（85）【中声母音・二重（半）母音】、姜宗出（93）、木内（98）【基本母音・二重母音】、ＭＬ（99）【基本母音・複母音】、金容権（86）、許秦（98）【基本母音・複合形母音】、韓先熙・金幸子（93）【基本の母音・二重母音】、ＰＯ（96）【基本形母音・複合形母音】、林昌奎・李鐘姫（00）【基礎母音・合成母音】、梁昊淵（79）【単母音・二重母音】、韓龍茂（91）【単母音・複合母音】、高麗（72）【単母音・複母音】、ＭＥＭＯ（97）【単純母音・複合母音】、金容権（83）、ＪＴＢ（92・98）【母音・複合母音】、金浪洙（97）【母音・合成母音】、鄭和子（94）【母音・複母音】、ＬＲＡ（78）【母音・特殊な二重母音】、呉俊東【基本形の母音・複合母音】、尹宣熙（91）【母音・二重母音】

上掲のリストからもわかるように、朝鮮語では母音の説明において多彩な用語が用いられている。これは未だ朝鮮語学習レベルでは確固とした説明体系が確立していないことを示すだけであって、決して歓迎されるべき現象ではない。

「基本母音、単母音」という用語は音声学で単母音を指す語であり、「二重母音、重母音、複合母音、複母音、合成母音」などは二重母音（あるいは重母音）を指す語である。『訓民正音（解例本）』で示された母音字構成原理に基づく「基本母音字」と「合成母音字」という母音字の２分類は、単母音と重母音の分類とは一致しない。したがって、上掲例のような用語使用は初歩的な誤まりと言わざるを得ない。

姜求栄（85）は「二重（半）母音」という意味不明な用語を用いているが、おそらく二重母音と半母音を同じものと誤解しているようであ

る。高木（94）は「8個の基本母音・6個の半母音・7個の重母音」などと、およそ議論になりそうにない母音の分類を行っている。

『訓民正音（解例本）』で示された制字原理に基づいて母音字を分類する方式は、母音字がいかなる原理で構成されたかを説明するのであれば有効であるが、この分類のもとで現代朝鮮語の母音の発音を体系的に説明しようと試みるには適切ではない。

朝鮮文字が作られた当時においては、母音字母の「合用」の結果生じた文字構成と、その文字が有する音価との間に直接的な対応関係が存在したが（たとえばㅏ /a/ とㅣ /i/ の合成文字ㅐの音価は二重母音 /aj/ だった）、[30] 의を除く全ての下降二重母音がその後の歴史的音韻変化によって、合成文字の内部構成とその音価との対応関係が崩壊した。（たとえば、ㅐの音価は中期朝鮮語では /aj/ だったが、後に単母音 / ɛ / に変化した）

それにもかかわらず、学習者が混乱するであろうリスクを抱えたまま、敢えて「ㅐはㅏとㅣからなる」といった解説を加えることにどれだけの意味があるのだろうか。このリスクは、たとえば金裕鴻（98）においては、「基本母音の文字」に二重母音のㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠが含まれ、「合成母音の文字」に単母音のㅔ、ㅐが含まれている事実を指摘するだけで十分に証明されるところであろう。

もし、朝鮮文字の成り立ちを説明しようとするのであれば、文字体系に基づいて、発音解説とは別のところで、朝鮮語の歴史的音韻変化をも踏まえた文字解説がなされるべきだろう。そして、発音解説は音素体系に基づいた文字の分類のもとに行なわれるべきである。[31]

こうした説明法を取らない例として、たとえば原谷（90）は、「母音どうしを重ねたものは11個あり、これらは重母音と呼ばれています」と書いているが、正しくは「母音字どうしを重ねたもの」と書かれなければならない。さらに、歴史的に厳密に言えば母音字を重ねて作られた母音字にはㅏ、ㅓ、ㅗ、ㅜ、ㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠもある。たとえば、ㅏは「天地人」のうち人にあたるㅣと天にあたる・の合成である。また、こうした記述は先にも述べたように、二重母音のㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠを「基本母音」、単母音のㅐ、ㅔを「重母音」と記述するという誤りを犯しており、文字の制字原理と文字の現実の音価とが混乱したカオスの世界をさまよっている。

さらに原谷（97ａ）は、子音字母「ㅇ」は中期朝鮮語の母音字である「・」（アレア）[32] が変形してできたものだという荒唐無稽なことを書き、また子音字ㅇは「口をあける発音」を象形して作られた文字だという、世宗大王も腰を抜かしてしまいそうな珍説をでっち上げている。[33] 言うまでもなく、子音字「ㅇ」は朝鮮文字が作られた当初から既にあったものである。そして、これまでに消失した文字はあっても、開化期の池錫永の『新訂国文』における「・」（アレア）と取り換えるべき新文字（1字）制定の提案や、解放直後の北朝鮮における金枓奉（김두봉）らによる「新六字母」の考案・採用の試みなどは歴史上存在したが、新たに作られ現在も用いられている朝鮮文字など一つも存在しないのである。

渡辺（88）は、半母音の基本概念すら全く取り違え、単母音ㅏ /a/、ㅓ / ɔ /、ㅗ /o/、ㅜ /u/ に対応する「半母音」として、ㅑ /ja/、ㅕ / jɔ /、ㅛ /jo/、ㅠ /ju/ があると書いている。[34]

そのうえ渡辺（86）は、ㅘ /wa/、ㅙ /w ɛ /、ㅚ /we/、ㅝ /wɔ /、ㅞ /we/、ㅟ /wi/ も「半母音」であるとした上、懇切丁寧にも「上に示した半母音は単母音に分解できる」などという、音声学における荒唐無稽なコペルニクス的転回を企てるに至った。

渡辺氏は、「ＮＨＫラジオハングル講座」講師を長年務めた、朝鮮語学習者の間では良く知ら

れた人であるだけに、その悪影響は計り知れない。

朝鮮文字が創製されてから約550年経過する間に、多くの母音字の音価は歴史的変化を被っている。このことを考慮に入れないで母音字を説明しようとする弊害は、このほかにも朝鮮語学習書の随所に現われている。

さらに、渡辺（88）の「合成母音字は単母音を組み合せて、色々な発音を示すために作られた文字」だという説明では、「単母音」という部分からして間違っている。すなわち、現代朝鮮語で単母音であるㅐ/ε/、ㅔ/e/について言えば、これらは朝鮮文字創製当時においては、字母ㅏ/a/とㅣ/i/の合成文字ㅐの音価は二重母音/aj/、ㅓ/ɔ/とㅣ/i/の合成文字ㅔは二重母音/ɔj/だったのである。「色々な発音を示すために作られた文字」という説明は、考えてみれば当然すぎる話ではあるが、しかし、朝鮮文字が作られた当時10個あった下降二重母音[35]は、その後、単母音化などの歴史的音韻変化が生じた結果、もはや合成文字の構成からは、その音価は論じられなくなっている。

したがって、渡辺（88）をはじめ多くの学習書が示すㅏ/a/＋ㅣ/i/→ㅐ/ε/、ㅓ/ɔ/＋ㅣ/i/→ㅔ/e/といった形での文字の構成と音価に関する説明上の混乱は、朝鮮語学習者に無用な精神的負担を強いるものとなっている。

今井（99）は単母音ㅔを「複合母音」だと言い、「基本母音のㅓ［アとオの中間の音］とㅣ［イ］が合わさったものです。」などと、とんでもない説明を加えている。圧巻は「ㅗ［オ］＋ㅣ［イ］でㅚ/we/になるんですが、ちょっと発音がむずかしく、ㅗとㅣを素早く発音するのがコツです」とか、「ㅗ［オ］＋ㅏ［ア］＋ㅣ［イ］と３つの母音が組み合わさったのがㅙ/wε/です」といった部分で、この本を買って読んだ学習者は言うまでもなく、書いた当の本人ですら何を書いたのか理解できていないはずである。

ちなみに、15世紀におけるㅚ、ㅙの音価はそれぞれ二重母音［oj］、三重母音［waj］であったと見るのが、通説となっている。

これらは15世紀中葉の音韻体系に基づいた朝鮮文字の制定原理をもって、現代語の母音字の音価を論じるという過ちを犯した最たる例である。

これまで批判してきたような母音字とその音価の説明における混乱は、一向に跡を絶ちそうにない。最近出版されたばかりの小倉紀藏著『韓国語初めの一歩』（32頁）も、「基本母音」にはㅏ/a/、ㅓ/ɔ/、ㅗ/o/、ㅜ/u/、ㅡ/ω/、ㅣ/i/、ㅑ/ja/、ㅕ/jɔ/、ㅛ/jo/、ㅠ/ju/、の10個があり、「基本母音」を合成した「合成母音」にはㅐ/ε/、ㅔ/e/、ㅒ/jε/、ㅖ/je/、ㅘ/wa/、ㅙ/wε/、ㅝ/wɔ/、ㅞ/we/、ㅚ/we/、ㅟ/wi/、ㅢ/ωi/の11個があるとし、これらはそれぞれ「基本母音字」、「合成母音字」であるとも書いている。（同上書、40頁）ここでも、ハングル創製時における制字原理と現代朝鮮語における母音の音価（単母音と重母音の区別）を盲目的に重ね合わせた、度し難い過ちを犯している。

さらに、「現代日本語では母音に数えない音も、韓くに言葉では母音に数えています。それから「エ」の音を基本母音と考えない点も日本語と異なる点です。」（同上書、32頁）などと言うくだりは、朝鮮語学に対する全くの無知を告白するものでしかない。ここで小倉氏は単母音を指して「基本母音」と言っているようであるが、「エ」の音価を持つ朝鮮語ㅐ/ε/、ㅔ/e/が単母音であることは言語学の常識以外の何物でもない。たしかにこれらは文字構成上では「合成母音字」ではあるが、これらを「合成母音」（＝重母音）であるなどと言うのは、朝鮮語学の世界では議論のまな板にのぼせようもない戯言に過ぎず、「韓くに言葉では「エ」の音を基本母音と考えない」などと書いたことに対して、朝鮮民族の学問に対する冒瀆だと批判されても、

返す言葉もないだろう。

朝鮮語は日本語と類似した言語構造をなしている点が強調されるあまり、妙な馴れ合い感覚から正確な学習を疎かにする傾向がみられる。そうした馴れ合い気分が、朝鮮語学（Korean Linguistics）の成果を学ぼうともしないで学習書を書いて世に問うという無謀さを容認してきた。

正規の教育機関における朝鮮語教育が広く行われるようになったのは、比較的最近のことである。日本における朝鮮語学習の機運は、むしろ民間で支えられてきた。かつて、市民レベルでの署名運動を通じた要望によって、ＮＨＫの外国語教育番組に「ハングル講座」が組み込まれたのは、そのことを如実に物語っている。しかし、民間主導型学習運動の水準を支えるに足る朝鮮語教育スタッフが決定的に不足していた。長年にわたる朝鮮語軽視の歴史が、今こんな形で私たちにしっぺ返しを加えているとも言えよう。

おわりに

明治以来、国家レベルの手厚い保護のもとに推し進められてきた欧米諸語の教育研究とは異なり、約30年ほど前までは、朝鮮語は「特殊語学」としてごく少数の教育機関でのみ行なわれていただけである。

このため、近年の朝鮮語学習熱の急速な高まりに比して、朝鮮語を正確に教授し得る人材は未だ多くは輩出されていない。そして、朝鮮語学習書に対する需要の急増にもかかわらず、出来の良し悪しを見分ける力を出版社の編集者も学習者も十分に持ち得ない状況にとどまり、いい加減なテキストを巷に氾濫させることになっている。

本稿では朝鮮語学習書の否定的な側面を取り上げているが、朝鮮語学の専門家の手になる優れた学習書も出版されている。こうした優れた学習書が雑本に紛れ込まないよう、朝鮮語教育を担当する者は心すべきであろう。

今後、本学においても朝鮮語教育を発展させていくため、朝鮮語教育研究会を開催し、ファカルティ・ディベロップメントの一環として朝鮮語教授法に関する議論を深めていかなければならないと考えている。

そして、朝鮮語の基礎をしっかり身に付けた学生を育て、ひいては、関西の地においても科学的体系性を兼ね備えた朝鮮語学習の気運を高めていかなければならないと考えている。科学的体系性を備えた外国語教育を根付かせることは、教育と研究を同時に進める大学人に課された重要な課題であるからである。

本稿を締め括るにあたり、本学朝鮮語受講生を対象としたアンケート調査実施に快く御協力下さった朝鮮語担当の諸先生方に、心より感謝の言葉を申し上げたい。

〈注〉

1 「韓国」（「大韓民国」という正式国名での記載は外国人登録では認められていない）、および「朝鮮」という「外国人登録」における「国籍」欄での二通りの記載は、戦後入管体制上生じたものであり、いわゆる「朝鮮」籍は朝鮮民主主義人民共和国の国籍ではなく、朝鮮半島出身者であることを指すという政府見解が示されている。そして、日本政府は「韓国」から「朝鮮」への書き換えは認めていない。こうした状況から、在日韓国・朝鮮人の「韓国籍」、「朝鮮籍」は、必ずしも南北の国家への帰属意識とは対応していない側面がある。かように南北の問題は複雑な面があるので、「在日コリアン」という総称も用いられている。本稿では、一般に広く用いられている「在日韓国・朝鮮人」という呼称を用いる。

2 1997年現在、日本の高校で英語以外の外国語

科目を開設している学校数と、その履修者数は、中国語303校（履修者数15,390人）、フランス語191校（9,187人）、ドイツ語97校（4,767人）、朝鮮語103校（3,929人）、スペイン語47校（2,236人）、ロシア語21校（819人）、その他の外国語26校（395人）となっている。（『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育』、13頁）

3『한글맞춤법』（ハングル正書法）の「第2部　標準発音法」第4項

4『한글맞춤법』（ハングル正書法）には、二重母音での発音は表示されていない。『한글맞춤법（ハングル正書法）標準語解説』（1988：243頁）では、上昇二重母音 / ɯ i/ と見ているので、ここではこの記述に従った。

5 ㅚは中部方言（京畿道・江原道・忠清道、および黄海道の一部地域）と全羅道方言においてのみ、ㅟは全羅道方言においてのみ、しかも老年層の人々によってのみ単母音 /y/ で発音されると言われる。そして、多くの方言において、ㅚには二重母音［we］·［wɛ］、もしくは単母音［e］が対応し、ㅟには二重母音［wi］、もしくは単母音［i］が対応している。（金ヨンファン（1982）、ペ　チュチェ（1996）、李翊燮・李相億（1997）参照）
朝鮮文字創製当時はㅚ、ㅟともに下降二重母音 /oj/、/uj/ だったとされるが、後に単母音化して /ø/、/y/ となった。更にその後、現代では二重母音化が進行している。

6 注5でも触れたように、ㅚは黄海道一部地域・江原道でのみ単母音 /ø/ で発音され、ㅟは単母音 /y/ で発音される方言地域がないように、北朝鮮においては、もともとこれらが単母音で発音される方言地域は非常に限定されている。こうした状況を背景に、これを単母音として扱うか二重母音として扱うかをめぐって議論があるようである。
『朝鮮語文法1（語文論・形態論）』（1960年）は、ソウル地方を除くほとんど全ての方言でㅟが二重母音で発音されている現実を指摘しつつも、「しかし、この母音も中部方言では単母音で発音されているだけに、標準語の音韻体系においてまで二重母音と規定しようとする意見には同意できない。」（同書23頁）と主張している。
『조선말규범집（朝鮮語規範集）』（1966年6月）の「標準発音法」第3項では、「ㅟはどんな位置でも単母音で発音することを原則とする。」と規定し、単母音での発音が「原則」であると留保している点が現行発音規範と異なる。

7 たとえば、『人文高等学校文法　教師用指導書』（1978年）や、人文系高等学校教科書『高等学校文法』（大韓教科書株式会社、1985年）ではㅟ /y/ を除いた9母音体系を示していた。1991年に出された人文系高等学校教科書『文法』では10母音体系が示されるようになったが、これは1988年に公示された『ハングル正書法』が規定した10母音体系に合わせたものと思われる。

8 たとえば、『標準韓国語発音練習1』（高麗大学校民族文化研究所、1991年）、『韓国語1』（韓国外国語大学校外国語研修院、1996年）など。ところで、8母音体系が歴史上はじめて提起されたのは金枓奉の『조선말본』（1916年、31頁～32頁）においてであると見られている。（『国語学 어디까지 왔나』、東亜出版社、1990年、55頁）

9 梅田博之（『ＮＨＫハングル入門』、1985年）、ペ　チュチェ（1996年）など。

10 李ホヨン（1996：124頁）は、「第二音節以下でも、子音が先行しないときにも /i/ で発音される傾向があるが、ゆっくりとした慎重な発話では二重母音 / ɯ i/ で発音される。」としている。また、의의（意義）のようにㅢが二つ連なって発音されるときは、［ɯ i］のように第1音節でも의は単母音 /ɯ / で発音されると

いう（第２音節では /i/ と発音される）。

また、河野六郎（1977：17頁）は、ㅢの音価は［ɨi］であるとし、「属格助詞ㅢはゆっくり発音する時は［－ɨe］というが、速く話す時は殆ど［e］と発音するとしている。

11「聴こえ」（sonority）が順次増大する二重母音。この場合、音節主音（成節音）は［i］となる。これに関し、李ウンジョン（1996：76頁）は次のように説明している。

「韓国の標準発音圏における二重母音の発音では、ㅢ / ɯi/ の音節主音は単母音 /i/ で実現する。それはㅢを長く発音するとき、［i］だけが持続するという事実を通してもわかる。」

韓国では、ㅢの音価については、上昇二重母音と見る見解、下降二重母音と見る見解、そして、綴字上存在するだけで実際の音価は存在しないという３通りの見解が示されていて、一定しない。

たとえば、崔鉉培(61)、李熙昇(78)、許雄(84)、志学社（93)、李ホヨン（96）等は音節主音が後部音にくる上昇二重母音ㅢ / ɯi/ とみなし、李翊燮（86・97)、李基白（91)、金ヒョンジュ（96)、人文系高等学校国定教科書『文法』(1991年初版)等は音節主音が前部音にくる下降二重母音 /ωj/ とみなしている。

また、李翊燮（1986：61頁）は「ㅢ / ωj/ は特異な二重母音である。その他のｊ系二重母音はすべて /j/ が母音の前で結合するが、ㅢだけはその反対だからだ。」と下降二重母音であると見なしながらも、「こうした特性ゆえに、ㅢの－を半母音として処理する方案（つまり、上昇二重母音とする方案－引用者注）を採択することも出来る。しかし、このようにすれば半母音を /w、j/ のほかにもう一つ設定しなければならない煩雑さがあり、普通はこの方案を採択しない。」と言う。事ここに極まりといった感じである。上昇二重母音でも、下降二重母音のどちらでもよいと言うことなのだ。どちらでもいいのだが、上昇二重母音と見なすと音素体系の中に半母音がもう一つ増えて煩雑になるからやめておこうという。いかにも分りやすい言い方だが、面倒だから簡単なほうを採用しようという、音声学的に考えれば納得のいかない論でもある。

河野六郎（1977：14頁～15頁、17頁）は、「母音は日本語よりずっと複雑である」として、ㅢを二重母音としつつも、「母音」のリスト11音（ㅏ、ㅓ、ㅗ、ㅜ、ㅡ、ㅣ、ㅐ、ㅔ、ㅚ、ㅟ、ㅢ）の中に並べ、「半母音との結合による二重母音」のリストとは別に扱っている。そして、ㅡは「中舌母音といふより中舌よりの非円唇後舌母音」なので /ω/ と見なし、/ω/ と /i/ の結合（ㅢ）では /ω/ は非円唇中舌母音の / ɨ / となると説明していることから、ㅢは半母音との結合ではなく、２つの単母音の結合からなる二重母音と見なしていると思われる。なお、李ヒョンボク（1981：23頁）によれば、/ω/ はユ림（絵）に含まれる母音ㅡのような長母音で、/ ɨ / は하늘（空）に含まれる母音ㅡのような短くて弱い音だという。

ㅢを上昇二重母音とみたり、中世朝鮮語にあった下降二重母音の最後の残滓であると見る見解もあることに対して、李基文（1961：229頁）は、実際にはㅢは正書法で文字が認められているだけであって、ㅢは語頭では［ω］（または［i］)、非語頭では［i］、「属格語尾」（属格助詞）では［e］と発音されており、現実の発音では母音字ㅢに対応する音素など存在しないと言っている。

鄭然粲（1997）も、ㅢは歴史的音韻変化の第１段階として、属格を除く非語頭音節で / 의 / が /i/ に変わり、次いで語頭で / 의 / が /ω/ に変わり、更に属格で / 의 / が /e/ に変わったとしながら、「そうでありながらも、文字は少しも変わらないで用いられているだけである」と二重母音音素ㅢ /ωi/ の存在を否定してい

る。このように、母音音素ㅢの存在をめぐる議論は、未だ決着がついていない。

12 注11でも述べたように、この母音については意見が分かれており、綴字上存在するだけで、実際の発音では存在しないとか、下降二重母音で音価は/ωj/であるとか、上昇二重母音で音価は/ωi/であるとか言われる。また、北朝鮮ではこれこそが「純粋な意味での二重母音」とされ、その他の二重母音は「準二重母音」とみなされている。

13 後で見るように、北朝鮮では二重母音ㅢを二つの「完全な母音」が同一音節内で実現するものとみなしているため、半母音/ω/はリストに入り得ない。

14『朝鮮語規範集』(1988年)の「文化語発音法」第3項。詳細については、本稿注5、注6を参照のこと。

なお「文化語」とは、金日成の「朝鮮語の民族的特性を正しく生かしていくことについて—言語学者たちと行なった談話」(1966年5月14日)において、従来の「標準語」という用語と置きかえるために新たに提示された用語。韓国における「標準語」ではなく、北朝鮮なりの新たな理念と政策に基づく標準語であることを明示しようとしたもの。『朝鮮語大辞典』(社会科学出版社、1992年)では、「文化語」を次のように解説している。

「主権を掌握した労働階級の党の領導下で、革命の首都を中心とし、首都のことばを基本として形成されている、労働階級の志向と生活感情に沿った形で革命的に洗練され美しく整えられた言語。社会主義民族語の典型で、全ての人民が規範と見なすべき文化的な言語である。」

15 なお、ㅢ以外の二重母音については、すべて次のように分類されている。

/j/先行重母音(ㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠ、ㅖ、ㅒ)

/w/先行重母音(ㅘ、ㅝ、ㅞ、ㅙ)

16 この重母音の特徴は、水平的(原文は「並行的」)な性質、すなわちㅢの前部音と後部音が共に成節的役割を果たす点にあるとされる。

17 北朝鮮において、一部の学者によってこのように/j/後続二重母音と見る見解が示されていることは、特に注目される。

18『朝鮮文化語文法規範』(20頁)は「母音要素」である「ㅡ/ω/」について、次のように説明を加えていることから、半母音とは見ていないと判断される。

「口腔内で呼気に対して障害を与えることが全くないまま発音される母音要素であり、それを発音する時間も半母音/j/、/w/のように短くない。母音要素/ω/は発音する時間の長さが完全な母音(온근 모음)に比べて少し短く、後続の/ㅣ/と合わさって一つの音節をなすために母音要素となる。」

また、『文化語文法規範』(1972)は、半母音/j/、/w/はとても短く発音されるので「短い母音」(짧은 모음)とも言い、これらは「母音の構成要素」であるとしているが、「母音要素」/ㅡ/については何も言及されていない。

なお、韓国の河チグン(1993:257頁)は、北朝鮮では「母音要素」という用語が半母音を意味すると指摘しているが、なお検討を要し、判断が難しいところである。

19 注目すべきことに、キム ペクリョン(1987:44頁)は北朝鮮の「文化語発音法」におけるㅢの規範的音価を否定し、二重母音ではなく単母音「i」(あるいは[ω])であることを主張して、次のように述べている。

「/j/先行二重母音の類型や/w/先行二重母音の類型は、前の母音要素が高舌で短い不完全母音要素/j/や/w/に変わったのとは異なり「ㅢ」は前後のいずれの要素もそのような変化を生じなかった代わりに、二重母音としての存在自体を終え、新たな単母音に変化していく方向を取ってきた。二重母音「ㅢ」の構成要素

が持つ音節形成能力と関連して、前の「ㅡ」がそのような能力を持つとしながら下降二重母音と見る見解と、単語の主に第1音節において二重母音「ㅢ」の二つの構成要素が両方ともそのような能力があるとみて水平的二重母音と認める見解があるが、この点でも「ㅢ」は上昇二重母音として存在する /j/ 先行二重母音の類型や /w/ 先行二重母音の類型とははっきり区別される /i/ 後続二重母音の特性を示しているのである。二重母音「ㅢ」は /j/ 後続二重母音が単母音に変化した一般的趨勢に沿って単母音「ㅢ」に変わった後、同じ舌の高さにある母音「i」と「ω」に包摂されてしまった。」

20『朝鮮文化語文法』(1979年、23頁・30頁)。

21 同上書、42頁。

22 李ウンジョン (1996：76頁) も「『朝鮮文化語文法』でいう「完全な母音」が成節音を意味するものと解釈するとき、二つの成節音の結合体が一つの音素だとする記述は理解しがたいものである。」と述べている。

23『朝鮮語文法1(語音論·形態論)』(1960年、23頁)、『말하기 教員用参考書』(1966年、32頁)。

24 属格助詞ㅢの場合、ㅡの方がㅣより気音周波数が高く、下降二重母音であるという。(金ソングン：55頁)

25 中期朝鮮語では半母音 /j/ で終わる10個の下降二重母音が存在していたが、その後母音縮約過程を通じてこれらの多くは単母音化した。そして、ただ一つ縮約困難なㅢだけが、母音脱落という音韻変化過程を経て母音衝突 (hiatus) を回避しながら単母音化の道を歩んできた。

歴史的にㅢだけが下降二重母音になれなかった理由は、母音「ㅡ」も母音「ㅣ」も「聴こえ」が同じであるため (イェスペルセンの sonority で言えば、6度)。二つの母音が同一音節内で音節主音と音節副音とに機能分担するためには、互いに「聴こえ」の度合いが異なっていなければならない。なお、「聴こえ」は母音の場合、低舌になるにつれて強まる。

26 今日言うところの「基本母音字」10個は、「基本字」(·、ㅡ、ㅣ)·「初出字」(ㅏ、ㅓ、ㅗ、ㅜ)·「再出字」(ㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠ) の計11個のうち、「基本字」の「天」を象ったアレア (·) の母音字を除いた10個である。

また、今日言うところの「合成母音字」11個は、「二字合用字」12個·「三字合用字」4個の計16個のうち、今日用いられなくなった5個の文字を除いたものである。

27 韓国の『ハングル正書法』(1988年) 第2章「字母」第4項では、字母の順序を「ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅡ、ㅣ」、「ㅐ、ㅒ、ㅔ、ㅖ、ㅘ、ㅙ、ㅚ、ㅝ、ㅞ、ㅟ、ㅢ」と定めている。また、北朝鮮の『朝鮮語規範集』(1988年) 第1章「朝鮮語字母の順序とその名称」第1項では、「ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅡ、ㅣ、ㅐ、ㅒ、ㅔ、ㅖ、ㅚ、ㅟ、ㅢ、ㅘ、ㅝ、ㅙ、ㅞ」と定めている。

28『訓民正音 (解例本)』の「制字解」に「[kh] は [k] 音に比べて声がやや強く出る。故に加画した。(そして、「ㄱ」(/k/) 字から「ㅋ/」(kh/) 字を作った)」と、有気音を表す子音字制字原理を解説している。

また、同書は「ㅛ与ㅗ同而起於ㅣ。(中略) ㅗㅏㅜㅓ始於天地. 為初出也。ㅛㅑㅠㅕ起於ㅣ而兼乎人。為再出也。ㅗㅏㅜㅓ之一其円者. 取其初生之義也。ㅛㅑㅠㅕ之二其円者。取其再生之義也。」(ㅛとㅗは (字形又は音類上) 同じだが (音価は) ㅣ /i/ から始まる。(中略) ㅗㅏㅜㅓは天と地より始まったので「初出」になり、ㅛㅑㅠㅕはㅣより始まって人 (即ちㅣ) を兼ねているので「再出」になる。ㅗㅏㅜㅓでその円 (即ちアレア「·」) を一つにしたのは、その初生の意味を取ったものである。ㅛㅑㅠㅕでその円 (即ち·) を二つにしたの

は再生の意味を取ったものである」(訳文は姜信沆（1993年）による）と、「初出」字・「再出」字制字の原理を説明している。

29 ㅚ、ㅟが単母音化した時期については、呉貞欄（1995：407頁）の18世紀末葉説、許雄（1985：487頁）の19世紀説など、諸説あって定まらない。

30 母音字ㅐ、ㅔ、ㅚ、ㅟ等は、朝鮮文字創製当時から単母音であったとする少数意見もある。(たとえば、『訓民正音과 音韻體系』姜吉云、68頁)

31『国語教授法　教員大学用』85～89頁）で「人民学校（小学校—引用者注）1年生に対する重母音字の教育では、それが合成された経緯を明かす必要はなく、合成されたそのままの母音「ㅘ」や「ㅝ」を教えなければならない。その理由は、論理的能力と分析能力が微弱な生徒たちに複雑さを避け、精神的な負担を少なくし、文字を正しく易しく教えようとするところにある。」と述べている。日本で出版された朝鮮語学習書の多くは朝鮮文字構成の原理までその冒頭部分で紹介しているが、どうしても文字構成原理を説明したいのであれば、少なくとも合成母音字は半母音を表示するために字母「ㅣ /j/」、および字母「ㅗ・ㅜ /w/」が合成されたものであることを明記すべきである。また、同上書（85頁）は「ㅐ、ㅔがㅏ＋ㅣ、ㅓ＋ㅣの結合として認識しないようにしなければならない」とも述べている。朝鮮語学習書執筆者は、こうした指摘にも、注意深く耳を傾けるべきであろう。

32 母音字「・」（アレア）は16世紀から18世紀にかけて、その音価が消失したが、文字の保守性故にその後も用い続けられ、「諺文綴字法」（朝鮮総督府、1930年）制定によって、その使用が全面廃止されることとなった。

33『訓民正音解例本』に「喉音ㅇ象喉形」と明記されている通り、喉の形をかたどって作られた文字。

34 渡辺吉鎔は、その著書『はじめての朝鮮語』（1983年、100頁）で「半母音とは、ここでは［j］ではじまる音をさす」として、ㅑ /ja/、ㅕ /jɔ/、ㅛ /jo/、ㅠ /ju/ を半母音であると書いたが、その後出された『韓国言語風景』（1996年、200頁）に至って、ㅑ、ㅕ、ㅛ、ㅠは二重母音であると正しく書かれている。

＜参考文献＞

《韓国》

『우리말본』崔鉉培、正音社、1961（初版は1929年）

『国語史概説』李基文、民衆書館、1961

『改訂国語史概説』李基文、民衆書館、1972

『人文系高等学校文法　教師用指導書』金敏洙、語文閣、1978

『国語音韻史研究』李基文、塔出版社、1980

『国際音声文字와 한글 音声文字』李ヒョンボク（이 현복）、科学社、1981年

『国語学—우리말의 오늘・어제』許雄、샘文化社、1984

『国語学概説』李翊燮、学研社、1986

『国語音韻学』許雄、샘文化社、1985

『北韓의 音声学研究』高トンファン（고 동황）、韓国文化社、1988

『한글맞춤법標準語解説』（ハングル正書法標準語解説）、李ウンジョン（이 은정）著（李崇寧監修）、大提閣、1988

『国語学 어디까지 왔나』東亜出版社、1990

『訓民正音과 音韻体系』姜吉云、蛍雪出版社、1992

『国語音韻論』李基白、韓国放送通信大学、1991

『韓国語音韻論』鄭然粲、開文社、1992

『高校文法（自習書）』志学社、1993

『南北韓文法比較研究』河チグン（하 치근）、韓国文化社、1993

『南北韓言語規範考察』李ウンジョン（이 은정）、

白山出版社、1996
『国語音韻論概説』ペ　チュチェ（배 주채）、新丘文化社、1996
『国語音声学』李ホヨン（이 호영）、太学社、1996
『우리말 発達史』金ヒョンジュ（김 형주）、世宗出版社、1996
『韓国의 言語』李翊燮・李相億、新丘文化社、1997
『改訂韓国語音韻論』鄭然粲、韓国文化社、1997

《朝鮮民主主義人民共和国》
『朝鮮語文法１（語音論・形態論）』朝鮮民主主義人民共和国科学院言語文学研究所言語学研究室、1960
『말하기 教員用参考書』李サンビョク（리 상벽）、教育図書出版社、1966
『朝鮮말規範集』（朝鮮語規範集）、朝鮮民主主義人民共和国内閣直属国語査定委員会、社会科学院出版社、1966
『朝鮮語文法』金日成総合大学出版社、1970
『朝鮮語　教員大学用』教育図書出版社、1970
『朝鮮語規範集解説』社会科学出版社、1971
『文化語文法規範（草稿）』金日成総合大学出版社、1972
『文化語文法規範』金日成総合大学出版社、1972
『国語教授法　教員大学用』、教育図書出版社、1973
『朝鮮文化語文法規範』金日成総合大学出版社、1976
『朝鮮文化語文法』科学・百科辞典出版社、1979
『朝鮮語方言学　朝鮮語学科用』金ヨンファン（김 영황）、金日成総合大学出版社、1982
『朝鮮語学史』金ピョンジェ（김 병제）、科学・百科辞典出版社、1984
『言語学論文集６』科学・百科辞典出版社、1985
「朝鮮語母音体系問題」（『言語学論文集７』２頁～70頁所収）金ペクリョン（김 백련）、科学・百科辞典出版社、1987
『朝鮮말規範集』（朝鮮語規範集）、朝鮮民主主義人民共和国国語査定委員会、社会科学出版社、1988
『朝鮮말 歴史２』リュリョル（류 렬）、社会科学出版社、1992
『朝鮮語大辞典』、社会科学出版社、1992
『言語学論文集11』科学・百科辞典出版社、1994
『朝鮮語文』第３号、科学百科辞典総合出版社、1994年
『朝鮮語語音論研究』、金ソングン（김 성근）、社会科学出版社、1995（「語音論」とは、一般には「音声学」を指す用語）
『主体의 朝鮮語研究50年史』金日成総合大学朝鮮語文学部、1996
（書名、出版社名等において、ハングル表記された漢字語は、便宜上、漢字に転写して示した。また、人名で漢字表記が確認できなかったものは片仮名で表記した。）

《日本》
『現代英語学辞典』成美堂、1973
『はじめての朝鮮語』渡辺吉鎔、講談社、1983
『ハングルの成立と歴史』姜信沆、大修館書店、1993
『河野六郎著作集（1）』河野六郎、平凡社、1977
『音声学』城生佰太郎、アポロン、1992
『韓国言語風景』渡辺吉鎔、岩波書店、1996
『日本の高等学校における韓国朝鮮語教育』、財団法人国際文化フォーラム、1999
『韓国語はじめの一歩』小倉紀蔵、筑摩書房、2000